第71回東北地区高等学校PTA連合会
盛岡大会報告書

2022 MORIOKA

えん

～応えよう、援けよう、団まろう！　子どもたちの未来のために～

期 間　令和4年 6/30(木)～7/1(金)

会　　場：盛岡市民文化ホール（大会）
主　　催：東北地区高等学校PTA連合会
共　　催：一般社団法人全国高等学校PTA連合会
後　　援：岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・岩手県高等学校長協会・日本教育会岩手県支部・（一財）岩手県教育振興基金
主　　管：岩手県高等学校PTA連合会

目次 CONTENTS

令和4年度 第71回東北地区高P連〈盛岡大会〉報告書

Ⅰ　フォトギャラリー

開会行事 ―― 2
研究協議 ―― 4
記念講演 ―― 5
高校生の発表 ―― 6
閉会行事・次期開催権あいさつ ―― 8
会場スナップ ―― 9

Ⅱ　盛岡大会を終えて ―― 13

Ⅲ　大会開催要項 ―― 14

大会次第 ―― 16

Ⅳ　開会行事

あいさつ ―― 18
来賓祝辞 ―― 20
表彰受賞者謝辞 ―― 22

Ⅴ　研究協議「新しい生活様式における持続可能なＰＴＡ活動とは」 ―― 23

Ⅵ　記念講演「南部美人の挑戦～地域を照らす光になるために～」 ―― 37

株式会社南部美人　代表取締役社長（五代目蔵元）　久慈浩介氏

Ⅶ　閉会行事

次期開催県あいさつ ―― 52
閉会宣言 ―― 52
盛岡大会参加者数 ―― 53

Ⅷ　編集後記 ―― 54

大会スローガン文字について

揮毫
盛岡第一高等学校
指導教諭
三浦真琴

第71回東北地区高等学校PTA連合会
盛岡大会

令和4年 6/30木～7/1金

会　場：盛岡市民文化ホール（大会）

開会行事【7月1日（金）】

会場／盛岡市民文化ホール

表彰状受賞者代表
松田 惠市

広報紙コンクール最優秀賞
宮城県気仙沼高等学校

司会
菅原 まゆみ

開会のことば
大会実行委員長
志田 順悦

あいさつ
大会会長
大柏 良

あいさつ
（一社）全国高P連会長
山田 博章

来賓祝辞
岩手県知事
達増 拓也

来賓祝辞
盛岡市副市長
中村 一郎

受賞者代表謝辞
田名部 智之

来賓紹介
大会実行副委員長
小林 康弘

開会のことば
大会実行副委員長
道地 勇

研究協議

岩手県高P連前会長
清水 成樹

岩手県高P連会長
大柏 良

秋田県高P連前会長
湊屋 啓二

五所川原第一高等学校会長
須藤 久輝

山形県立新庄北高等学校会長
坂本 健太郎

福島県高P連会長
原 正幸

宮城県石巻工業高等学校会長
尾形 直也

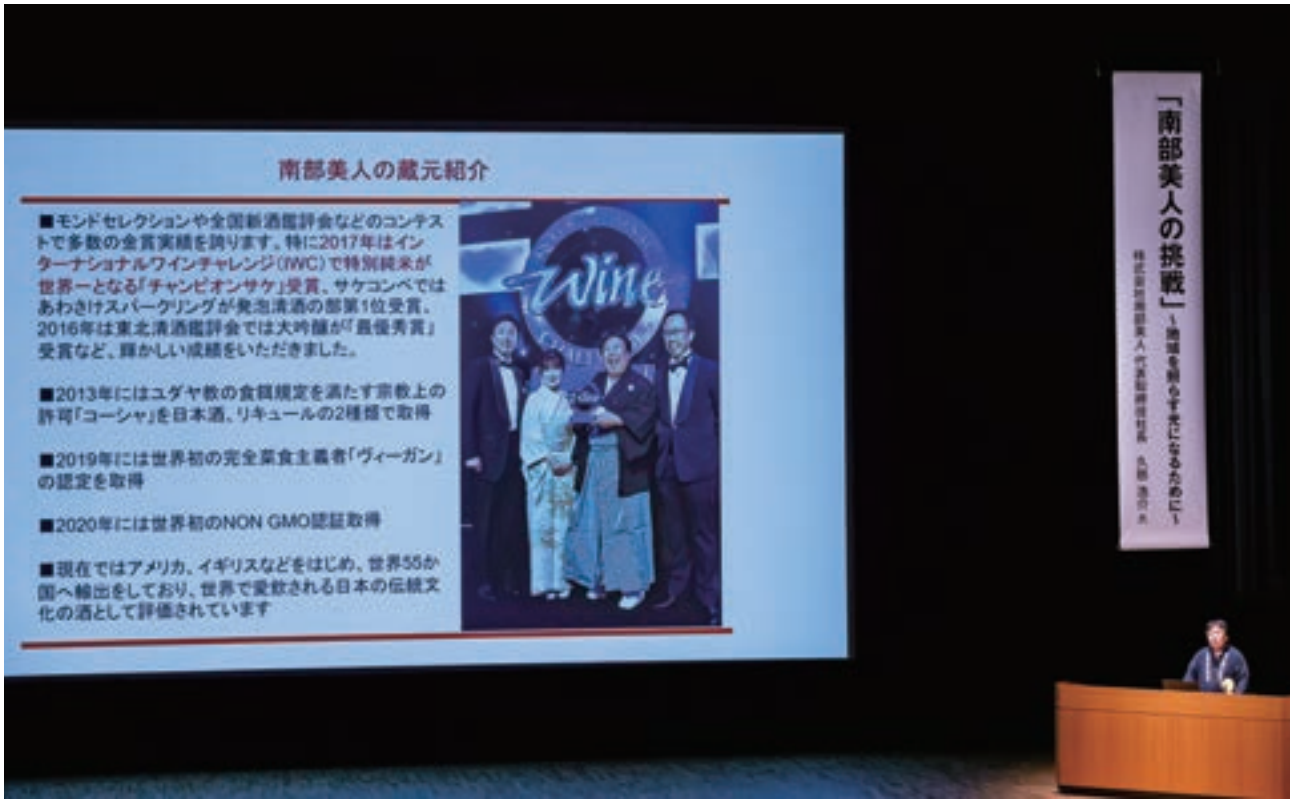
記念講演

「南部美人の挑戦」

～地域を照らす光になるために～

株式会社南部美人 代表取締役社長（五代目蔵元）
東京農業大学客員教授

久慈 浩介氏



久慈 浩介 氏

花束贈呈
横山 由美（岩手県高P連前母親委員長）

高校生の発表

渾身の演奏と歌、会場は感動の坩堝に

清く美しく輝き続ける　盛岡第二高校応援委員会

白梅乙女の心意気

素敵な時間を共有　盛岡第一高校吹奏楽部

明鏡止水　胸を打つ美しい演舞　盛岡第二高校なぎなた部

伝統の弊衣破帽　花巻北高校応援団

歓迎と応援の心　不来方高校チアダンスサークル

盛岡の夏を彩る　盛岡商業高校盛商さんさ実行委員会

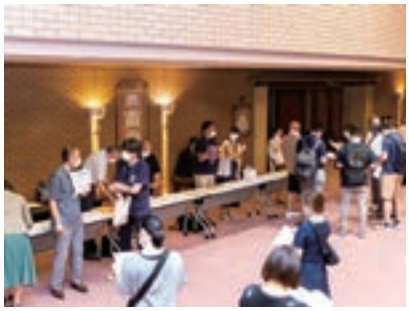
閉会行事・次期開催県あいさつ

来年夏は福島大会で会いましょう　福島県高P連 原正幸会長のあいさつ

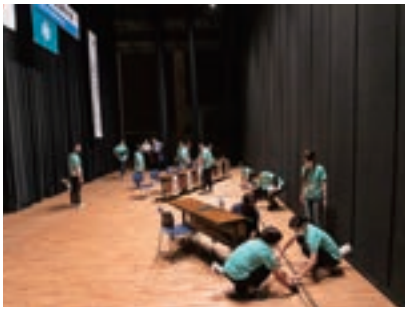
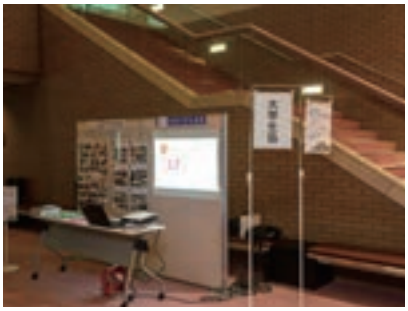
吾妻小富士の雪うさぎ「ももりん」も登場

閉会宣言
盛岡大会実行委員長
志田 順悦

会場スナップ



会場スナップ

会場スナップ

盛岡大会を終えて

第 71 回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会
盛岡大会実行委員長

志田 順悦

第 71 回東北地区高等学校PTA連合会盛岡大会は令和4年7月1日（金）、東北各県から約 760 名の会員の皆様を県都盛岡にお迎えして開催され、多くのお力添えによって盛会のうちに無事終了することができました。これもひとえに関係機関の皆様のご指導とご支援、参加者の皆様のご理解、大会運営に携わった皆様のご協力の賜物であり、実行委員会を代表して心から御礼申し上げます。

「『えん』～応えよう、援けよう、団まろう、子どもたちの未来のために～」このテーマには、コロナ禍を乗り越えて3年ぶりに開催される本大会が、東北の会員にたくさんの「えん」を結び、新しい時代に必要な学びを深め、子どもたちの「応援団」としてのPTA本来の力を回復するきっかけになってほしいとの願いが込められています。

そのため本大会では、各県の代表者によるパネルディスカッションを新たに企画し、「新しい生活様式における持続可能なPTA活動とは」をテーマに活発な情報共有と意見交換を行いました。「未知の課題や不安の多い時代に『正解』はなく、それぞれのやり方で今必要と思うことに自信を持って取り組んでいくことが大切」など貴重な意見が示されました。

また、記念講演では、岩手が誇る銘酒「南部美人」5代目蔵元の久慈浩介様を講師にお迎えし、「南部美人の挑戦」～地域を照らす光になるために～と題してご講演いただきました。東北の地から世界を視野に入れながら、酒造りや産業振興にまい進する力強い姿勢や懸ける情熱にふれ、私たち東北のPTAも大いに励まされ、たくさんの「元気」をいただきました。

さらに、高校生の発表が大会に花を添えてくださいました。盛岡第二高校なぎなた部による凛とした美しい演舞、盛岡第一高校吹奏楽部による華やかな演奏、盛岡商業高校さんさ踊り実行委員会による優美で洗練された「さんさ踊り」が披露され、さらに新たなサプライズ企画として、花巻北高校、盛岡第二高校、不来方高校の各応援団が映像で参加し活動発表するなど、会場からは惜しみない拍手が送られました。

先人たちが不断の努力で受け継いできたPTAの「人と人とのつながり」、そして「えん」。時代が混迷を深める中、その大切さは増すばかりです。

私たちは子どもたちの「応援団」。今、この思いを新たにし、東北そして全国の会員の皆様とさらなる「えん」を結び、これからも子どもたちに激励のエールをともに送り続けましょう。子どもたちの未来に輝く笑顔のために―。

最後になりますが、改めまして本大会を支えてくださったすべての皆様に心から御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

第71回東北地区高等学校PTA連合会
盛岡大会開催要項

1　期　　日：令和４年６月３０日（木）・７月１日（金）
2　会　　場：盛岡市民文化ホール（大会）、ホテルメトロポリタン盛岡 NEW WING（レセプション）
3　主　　催：東北地区高等学校ＰＴＡ連合会
4　共　　催：一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会
5　後　　援：岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・岩手県高等学校長協会・日本教育会岩手県支部・
　　（一財）岩手県教育振興基金
6　主　　管：岩手県高等学校ＰＴＡ連合会

7　東北地区高Ｐ連大会開催目的
　会員が相互に連携し、子どもたちの豊かな個性の伸長を図り、社会の進展に対して主体的に取り組むことができるたくましい高校生を育成するため、研修･研鑽を積み重ね、今後のＰＴＡ活動のさらなる充実発展に寄与する。

8　東北地区高Ｐ連大会開催方針
（１）保護者と教職員の生涯学習の場として、高校教育に関する建設的な意見交換を行う。
（２）高校生の健全育成に関する問題について討議し、今後のＰＴＡ活動を充実させる。
（３）家庭・学校・地域社会がともに手をとり、高校教育の諸問題に取り組む。
（４）ネット社会におけるＰＴＡの役割を認識し、モラルある情報社会の構築を目指す。

9　東北地区高Ｐ連大会研究テーマ・スローガン
（１）豊かな心を持ち、たくましく生きる高校生を育成しよう。
（２）教育環境について理解を深め、改善に努めよう。
（３）高校生の学習意欲と学力の向上について考えよう。
（４）会員相互の研修を深め、自ら生涯学習を実践しよう。

10　盛岡大会テーマ、開催趣旨、研究協議テーマ
（１）テーマ

「えん」
～応(こた)えよう、援(たす)けよう、団(あつ)まろう！　子どもたちの未来のために～

（２）開催趣旨
　近年、自然災害の頻発や地球的なパンデミックの発生、社会の複雑化や多様化の急速な進展など、私たちはかつてない困難な時代に直面している。そうした状況に悩み迷いながらも、子どもたちを健全に育み社会へ送り出すことは、いつの時代も変わることのない願いであり、私たちの責任でもある。
　ＰＴＡもまた、コロナ禍によって活動の停滞を余儀なくされている。活動を支える礎となる「人とのつながり」を取り戻すことが急務とされる中、新しい時代にふさわしい大会の開催が今こそ望まれている。
　大会テーマである「えん」は、人を結ぶ「縁」、人を援ける「援」、そして人々が集う「円」を意味する。そこに集う私たちは、子どもたちの希望に応え、学びを援け、共に団まり支えていく、まさに「応援団」である。
　私たちは、大会を通じて様々な課題や新たな時代への認識を共有し、子どもたちにも学び続ける背中を見せたいと思う。今この思いを胸に、未来にはばたく子どもたちへのエールを、ともに贈ろうではありませんか！
（３）研究協議テーマ
「新しい生活様式における持続可能なＰＴＡ活動とは」

11　大会日程及び会場

6月30日（木）

時　間	内　容	会　場
10：00～11：30	大会運営会議	盛岡市民 文化ホール
13：00～15：00	専門部打合せ、準備	
13：30～15：00	パネルディスカッション打合せ・リハーサル （パネリスト、コーディネーター、司会者、他関係者）	
15：00～17：00	ステージリハーサル	
17：30～19：30	レセプション（中止） （東北高P連役員、表彰者、来賓、実行委員　等）	ホテルメトロポリタン 盛岡ニューウィング

7月1日（金）

時　間	内　容	会　場
9：00～9：30	大会受付	盛岡市民 文化ホール
9：20～9：30	※応援メッセージ映像①　　盛岡第二高校　応援団	
9：30～10：30	○オープニング　　演舞：盛岡第二高校なぎなた部 ○開会行事（開会宣言、挨拶、祝辞、表彰、東北地区高P連役員紹介）	
10：30～12：00	○研究協議「新しい生活様式における持続可能なPTA活動とは」 6県代表によるパネルディスカッション	
12：00～12：45	○昼食・休憩	
12：30～12：50	○高校生による発表：盛岡第一高校（吹奏楽）	
12：50～13：00	※応援メッセージ映像②　　花巻北高校　応援団	
13：00～14：20	○記念講演　演題「南部美人の挑戦」～地域を照らす光になるために～ 講師　南部美人5代目蔵元　久慈 浩介 氏	
14：20～14：30	※応援メッセージ映像③　　不来方高校　チアダンスサークル	
14：30～14：50	○高校生による発表：盛岡商業高校（さんさ踊り）	
14：50～15：00	○閉会行事　次期開催県挨拶、閉会宣言	

第71回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会
盛岡大会次第

日　時　令和４年６月30日（木）～７月１日（金）
場　所　盛岡市民文化ホール、ホテルメトロポリタン盛岡ニューウィング

○6月30日（木）　会場：ホテルメトロポリタン盛岡ニューウィング

レセプション　17：30～19：30（中止）

司会：盛岡第四高等学校ＰＴＡ会長

1	開会のことば	大会実行委員長
2	大会会長あいさつ	大会会長
3	祝　辞	岩手県教育委員会教育長
		盛岡市教育委員会教育長
4	来賓紹介	大会実行副委員長
5	鏡開き	
6	乾杯	岩手県高等学校長協会長
8	祝宴	
9	閉会のことば	大会実行副委員長

○7月1日（金）　会場：盛岡市民文化ホール

◆映　像　盛岡第二高等学校　応援団

1　開会行事　9：30～10：20

総合司会：盛岡第四高等学校ＰＴＡ会長　菅　原　まゆみ

◇オープニング　なぎなた演舞　盛岡第二高等学校　なぎなた部

（1）開会のことば	大会実行委員長	志　田　順　悦
（2）あいさつ	大会会長	大　柏　　良
	（一社）全国高等学校ＰＴＡ連合会	山　田　博　章
（3）来賓祝辞	岩手県知事	達　増　拓　也
	盛岡市長　（代理　副市長）	中　村　一　郎
（4）来賓紹介	大会実行副委員長	小　林　康　弘
（5）表彰等		
①表彰状贈呈	受賞者代表　岩手県	松　田　惠　市
②感謝状贈呈	受賞者代表　青森県	田名部　智　之
③令和３年度広報紙コンクール表彰	受賞者代表	宮城県気仙沼高等学校
④受賞者代表謝辞	受賞者代表	田名部　智　之
（6）東北地区高Ｐ連役員紹介		
（7）閉会のことば	大会実行副委員長	道　地　　勇

2　研究協議　　10：30～12：00

大会テーマ：「えん」　～応えよう、援けよう、団まろう！　子どもたちの未来のために～
研究協議テーマ：「新しい生活様式における持続可能なＰＴＡ活動とは」
各県代表者によるパネルディスカッション
コーディネーター　　東北地区高Ｐ連顧問　　清　水　成　樹

3　昼食・休憩　　12：00～12：45

4　高校生による発表　　12：30～12：50

盛岡第一高等学校　　吹奏楽部
◆映　像　　花巻北高等学校　　応援団

5　記念講演　　13：00～14：20

講　　師　　南部美人代表取締役社長　５代目蔵元　久　慈　浩　介　氏
演　　題　　「南部美人の挑戦」～地域を照らす光になるために～
講師紹介　　大会実行委員長　　志　田　順　悦
花束贈呈　　大会実行委員　　横　山　由　美

◆映　像　　不来方高等学校　　チアダンスサークル

6　高校生による発表　　14：30～14：50

盛岡商業高等学校　　さんさ踊り実行委員会

7　閉会行事　　14：50～15：00

（1）次期開催県あいさつ　福島県高等学校ＰＴＡ連合会会長　　原　　正　幸
（2）閉会宣言　　大会実行委員長　　志　田　順　悦

開会行事・開会あいさつ

第 71 回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会
盛岡大会会長

大柏 良

盛岡まで足をお運びいただき、ありがとうございます。

５人いる子どもたちの小中学生時代は、PTA のクラス役員すらやったことはありませんでしたが、何故こういう場で挨拶をするようなことになったのかなあと考えました。中・高・大学と同じ学校に通った親友からの誘いもあったのですが、東日本大震災の被災地で出会った子どもたちの姿が、心に残っていたのが土壌になったと思っています。

私はテレビの仕事をしているのですが、東日本大震災の被災地で出会った人々のお話を伺う番組を今も続けています。その中で、非常に大きな被害を受けた、岩手県の山田町での出来事です。震災１か月後、避難所になっていた海近くの小学校で、避難していた小学3年生くらいの女の子が、ニコニコしながらチョコレートを2つ、小さな手で差し出したのです。「これ、あげる」（キミはおうちを流されちゃったんだろう!? それなのに…）この時ほど心が温かくなったことはありません。そして、いつか自分も他の人にその温かさを送らなければ、と思いました。

震災、コロナ禍、豪雨、さらには戦争。生きることが困難な時代に差しかかっているように思えます。その中で、子どもたちを守っていかなければならない。人として、この子たちの豊かな表情を見ることで、生きる力をもらっているのだから。後ほど、パネルディスカッションでこれからの PTA のあり方について話し合います。これからの PTA について、考えるきっかけになる大会になれば…と思っています。何かの気付きを一つ、ぜひお持ち帰りください。

最後に…コロナ収束が見通せない中、大会を開催することへの迷いが、正直ありました。しかし、多くの仲間たちが昨日から大会会場の準備を行い、本日も運営に携わっていただいています。その熱気、活気…。震えるような感覚を久しぶりに覚えました。そして、準備をするその姿と会場に訪れた多くの皆さんの姿を見た時、心の底から湧き出でくる感情がありました。本日おいでいただいた皆さんへの、歓迎の思いです。本当に、本当に、ようこそおいでくださいました!

あいさつ

一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会
会長
山田 博章

岩手県、そして東北地区の皆さん、おはようございます。また岩手県知事を始め御来賓の皆様におかれましては本日は大変お忙しい中ご列席を賜わりありがとうございます。

さて、私は先日行われました定時総会ならびに理事会におきまして令和4年度の全国高等学校PTA連合会の会長に選任されました山田と申します。まだまだ成り立ての初心者マークの会長ではございますが、皆様方と共に手を携えながら未来ある子どもたちが明るく楽しい学校生活が送れるように、また目指すべき方向に行けるように少しでもお手伝いできればと思っておりますので、今後とも皆様方のご支援ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

実は私、この盛岡の地に足を踏み入れるのは2回目でございまして。と申しますのも多分7年前になろうかと思うのですが、ここ盛岡で行われました第 65 回全国大会に一単Pの会長として参加をさせていただきました。私は近畿の和歌山で生まれ育っておりまして、東北地方に足を踏み入れたのはその時が初めてであり、もう一度訪れたいなあと思っておりました矢先、このような形で再度盛岡の地に来られましたことを大変うれしく思っております。

さて、この2年間というものはコロナ感染症という得体の知れないウイルスに振り回されて、PTA活動をしてこられた皆様方におかれましてもいろいろと制限され、思うような活動ができなかったことであろうと心中お察し申し上げます。そして、そのような活動ができなかったことが一因になったかどうかは分かりませんが、どちらかと言うと最近PTAに対しては少しアゲインストの風が吹いているのではないかと思われる節がございます。新聞やネット等の報道には皆様方が日々一生懸命努力をされているPTA活動には少しも触れませんが、反PTA活動のような意見には面白おかしく大々的に取り上げる傾向にあるのではないでしょうか。私は子どもが3人いるのですが、その子どもたちの小学校の育友会、そしてその後のPTA活動に携わらせていただいてから、かれこれ 15 年ぐらいになるのですが、この間にPTAに対する考え方も大きく変わって来ているのではないかなと思う今日この頃です。しかしながら親の子どもに対する愛情というのは変わっていないと思っておりますし、子どもたちや学校にとってもPTA活動というものは切っても切れないものになっていると思っております。ただ世の中は目まぐるしい速さで変化をしており、その変化に順応、対応して行かないと生き残って行けない中において、PTA活動も今この多様化した時代に順応した、持続可能な活動をして行かなければならないのではないかと考えております。しかしながら常にベースにあるのは、あくまでも子どもたちのため。この考えにブレが無ければ活動に対して賛同が得られると考えております。

本日ここに様々な形でお集まりの皆様方が心を一つにし、今大会のテーマでもあります「子どもたちの希望に応え学びを助け共に集まり支えて行く」という、この後ろに書いていただいてます応援団と成りうべく研鑽を積んでいただき、明日からのPTA活動の参考になることを祈念申し上げまして私からの挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

来賓祝辞

岩手県知事

達増 拓也

第 71 回東北地区高等学校PTA連合会盛岡大会の開催に際しまして、お祝いを申し上げます。

皆様におかれましては、日頃から東北各地において子どもの健全育成や、社会教育・家庭教育の充実、学校や地域との連携・協働に取り組まれていることに、深く敬意を表します。

新型コロナウイルス感染症は、生命や生活、更には経済や文化など社会全体に大きな影響を与えました。ポストコロナ期における新たな学びの在り方、デジタルトランスフォーメーションなど、コロナ禍を機に改めて考えるべき課題が明らかとなりました。

このような社会情勢の変化が激しい時代において、心身ともに健康でたくましく、豊かな人間性と創造性を備えた人材の育成を進めていくためには、学校教育はもとより、学校、家庭、地域が連携・協働して教育活動を展開していくことがますます重要となっています。

岩手県では、「いわて県民計画（2019 ～ 2028）」において、「東日本大震災津波の経験に基づき、引き続き復興に取り組みながら、お互いに幸福を守り育てる希望郷いわて」を基本目標に掲げ、「教育」や「子育て」、「コミュニティ」など各分野の施策を展開しており、オール岩手で復興やポストコロナを見据えた、持続可能な地域社会を目指して取組を進めております。

このような折、本県を会場に、東北各地から多くの会員の皆様をお迎えし「『えん』～応えよう、援けよう、団まろう! 子どもたちの未来のために～」をテーマに、研究協議、情報交換が行われますことは誠に意義深いものであります。会員相互に連携し、研修・研鑽を深められ、今大会の成果を今後のPTA活動の充実に大いに役立てていただきますよう御期待申し上げます。

結びに、本大会の開催に御尽力された関係者の皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、東北各県のPTA連合会のますますの御発展と、会員の皆様方の一層の御健勝、御活躍をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

来賓祝辞

盛岡市副市長

中村 一郎（盛岡市長 代理）

ご紹介をいただきました盛岡市副市長の中村でございます。

遠く各地からお集まりいただきました高P連の皆様、心から歓迎を申し上げます。谷藤市長より皆様への祝辞を預かってまいりましたので、ご披露させていただきます。

本日、ここに第71回東北地区高等学校PTA連合会盛岡大会が盛大に開催されますことをお祝い申し上げますと共に、盛岡市民を代表し、東北各地からお集まりいただきましたPTA関係者の皆様を心から歓迎申し上げ、皆様の日頃の熱心な活動に対しまして心から敬意を表します。

新型コロナウイルス感染症により子どもたちをはじめ私たちの生活に大きな影響が生じておりますが、そうした中、本大会が開催されますことは誠に意義深いものであると存じております。どうぞ皆様におかれましては、それぞれの郷土の未来を担う子どもたちの健全育成のために、PTA活動を通じて希望に満ちた未来へと導いてくださるようお願いを申し上げます。

さて、盛岡市は岩手山や姫神山などの秀峰を望み、秋にはサケも上る清流北上川や中津川、雫石川などが市内を悠々と流れる杜と水の都でもあります。6月11日には盛岡の初夏の風物詩ともなっておりますチャグチャグ馬コが3年ぶりに開催をされまして、多くの皆様が沿道に集まっていただきました。また、8月1日からは盛岡さんさ踊りの3年ぶりの開催をする予定となっており、現在、準備が進められております。この機会に皆様には本市の美しい街並みや自然、文化、歴史に触れていただきながら交流を深めていただければ幸いでございます。

結びに、大会開催にあたりましてご尽力いただきました関係者の方々に深く感謝申し上げますと共に、ご参会の皆様の益々のご活躍を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

令和4年7月1日　盛岡市長　谷藤　裕明。代読でございます。

本日はおめでとうございます。

表彰受賞者謝辞

受賞者代表

田名部 智之

受賞者を代表いたしまして感謝の言葉を述べさせていただきます。

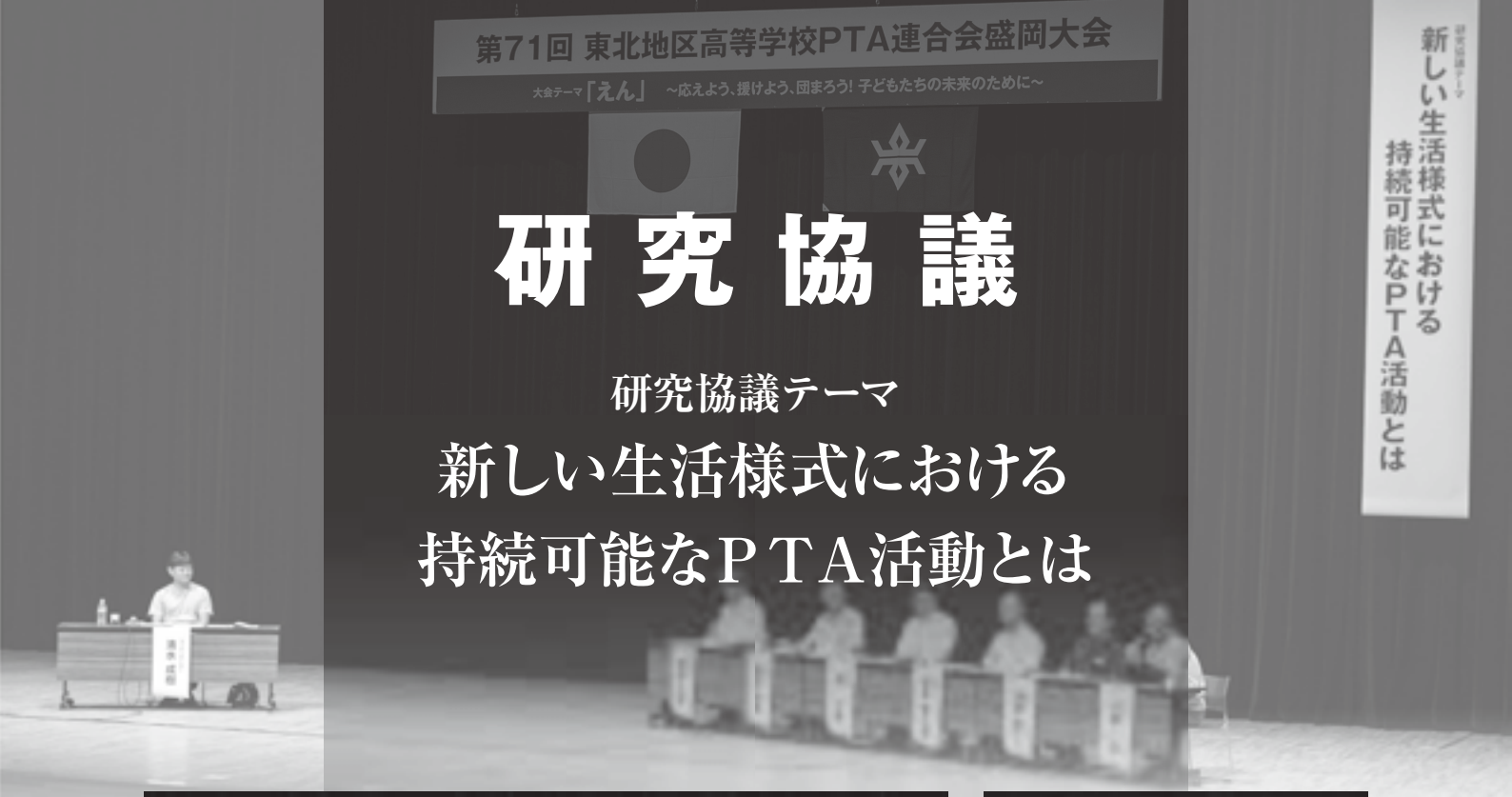
先月まで当会の会長を務めさせていただきました事で私に代表の謝辞を述べよ、ということだと思います。

この3年間、我々 PTA は非常に苦しい思いをしてまいりました。特に今日受賞された皆さんは、我慢の2年間だったのかなというふうに思っております。第 69 回秋田大会そして第 70 回青森大会をリアル開催できなかった2年分の悔しい思いがあります。それを今年、盛岡において大柏会長が決断し、リアルに東北大会開催が実現されたことに、感謝状を頂戴したものと併せまして感謝を述べます。本当にありがとうございました。

本日お集まりの我々 PTA は、先ほど全国の山田会長もおっしゃっていましたけれども、PTA 不要論まで飛び出すこの大変な中、知恵を出しながら、広報誌作りや、単位 PTA を運営してきた同士であります。今日の大会、この感謝状を頂戴して終了ということではなくて、せっかくいただきましたご縁でございますので、しっかり単位 PTA そして子どもたちが元気に活躍できるようにこれからも応援していくことをお誓い申し上げます。

まだ私は、単位 PTA の会長を続けておりますし、現役の PTA でもありますので、まだまだ活躍の機会があります。もう卒業されちゃった先輩方もいらっしゃると思いますが、逃しません（笑い）。そういう気持ちでずっと PTA を、長く続けていけるのも良さだと思っております。

本当に今日いただきました感謝状は一旦の区切りとして頂戴したいな、と思ってございます。これからもがんばってまいりましょう。ありがとうございました。



研 究 協 議

研究協議テーマ
新しい生活様式における持続可能なＰＴＡ活動とは

岩手県高P連前会長
清水 成樹

岩手県高P連会長
大柏 良

秋田県高P連前会長
湊屋 啓二

五所川原第一高等学校会長
須藤 久輝

山形県立新庄北高等学校会長
坂本 健太郎

福島県高P連会長
原 正幸

宮城県石巻工業高等学校会長
尾形 直也

清水成樹　コーディネーター・岩手県高Ｐ連前会長

ようこそ盛岡にお越しいただきました。そして山形以来3年ぶりの地区研修会が、このように開催できますことを大変うれしく思っております。コロナ前のPTAも知る、そしてコロナ元年を知る、そんなところからコーディネーターのご指名をいただいたものと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は新しい生活様式・ニューノーマルと持続可能・サスティナブルという、旬なキーワードを二つもいただきましたので、少しでも皆さんのヒントになるようなパネルディスカッションを進めて行きたいと思います。

令和4年、コロナも3年目に突入しました。色んなものが少しずつ動き始めています。そんな昨今、各県の代表6人にお越しいただきましたので自己紹介を兼ねて、近況報告も含めてお話をいただきます。

それでは青森県の須藤さんからお願いいたします。

須藤久輝　青森県　学校法人舘田学園五所川原第一高等学校会長

私たち第一高等学校も、コロナでいろいろと会議等々は時間制限、回数制限しながら粛々と活動してまいりました。私も、実は高校のPTAの経験はまだ浅いので、皆様のためになるようなことを言えるか自信も無くここに座っていました。皆様と一緒に勉強させていただいて、これを青森県に持ち帰りたいと思っています。

私たちの第一高等学校、そして西北地区（注：青森県高P連の地域的区分）の知り合いの皆様にも聞いたところ、やはりどこもコロナを気にしながらの活動だと。子どもたちを第一に考えると、やむを得ないのかなというお話をしました。逆を言いますと保護者の皆様も集まることは自粛したいムードが出ていたのかなと。しかし、活動は止めるわけには行きませんので、できる範囲で役員の皆様とはマスクしながら距離を置きながら今まで活動してまいりました。子どもたちのために我々役員も外の活動、少し外ではできるのかなというものはやってきました。本校の各委員の皆さんも、少数精鋭でやれる範囲でやって来たと。特に広報紙作成の委員会の皆さんは、やはり「広報紙」で伝えようということで、PTAの活動を写真とかカラーでより分かりやすい広報紙に少しずつ変えていったというのもコロナの影響かと思っています。今日は皆様のご意見をいただきながら勉強させていただければと思っています。

尾形直也　宮城県石巻工業高等学校会長

息子が電気科に入り、1年の学年委員、2年・3年でPTA会長をさせていただくこととなりました。本校も、通常であれば文化祭等でも模擬店を出店していたのですが、コロナによって中止しました。宮城県の他校の多くも活動を自粛しているところでした。その中でも工夫されていた高校さんでは、マラソン大会での模擬店で豚汁等を提供する際、業者さんに豚汁を発注して、配膳のみPTA会員が行なうというような形を取り、密になるのを避けて活動したという事例もあります。本校でもPTAの総会等も書面での決議を採りました。あとメールを活用して、そこで決議をとり、密にならないような工夫をしました。自粛や中止が多い中で、やはりPTA活動の見直しの時期にも来ているのではないのかなと思っています。創意工夫で活動して、どのような形を取れるのかというのを皆さんの意見から聞かせていただきたいです。その2年間やってはきましたが、実際のところ活動ができなかったので、PTAの会長として自分の業務できてないのではないかなという思いもありまして、皆さんの意見を今後のPTA活動に反映できたらなと思っています。

原正幸　福島県高P連会長・福島県立安積高等学校会長

今、お二方からお話ありましたように福島県も、2年間ほとんど活動ができないような状況になっておりました。単Pでも、今、息子が3年生で、1年生、2年生の時、副会長で学年委員長としていたんですけど、まず学校に行く機会が全く無い。先生とお話しする機会が無い。PTAの役員の皆さんと話をする機会が無いというような状況でした。学校の先生と顔と名前が一致しない、役員の人の顔と名前が一致しないという状況で2年が過ぎて、ポーンと会長になって、そ

して福島県高P連の会長に就任するとなった時に初めて高P連の集まりに出た状態でした。完全アウェー状態で大変辛い思いを今もしております。まず学校の情報が入って来ないというのが大きいです。学校の状況を息子から聞くのが殆どで、「随分アンテナの低い副会長さんだねえ」なんて皮肉を言われているような状況です。会長になってからは、だんだんと情報も入って来るようにはなりましたが、こういう集まりもやっぱりできないような状況にいたので。昨日の夜、久しぶりに福島県の皆さんと懇親会をやらせてもらい、いろんなレクリエーションや、PTAに対しての考え方などを教わったんですけど、「あっ、随分俺は意識が低かったんだな」と、お母さん方の話を聞いて思いました。そういう懇親の機会をどんどん増やして行くことによって、相乗効果で子どもたちのために何ができるのかということを考えられる機会になる。この2年間、そういう機会を奪われてしまっていた状況ですので、是非この機会に、何ができるのかをこの会場の皆さんと一緒に考えて行ければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

坂本健太郎　山形県立新庄北高等学校会長

今年から会長になり、いきなりこのような立場で、この壇上から皆様方にお話しするという機会を与えられ、緊張もしておりますし、何を話せるのかなということで不安でした。私の娘は現在3年生なんですけれども、まず入学式は4月の下旬でした。そこでようやく高校に入学できたなあというところからスタートしました。PTAの副会長を拝命したものの活動は全くなく、未知のウイルスに対して集まるなということで全てが書面会議。会議も活動も殆ど何もできなかったのが1年次だったと思います。2年次は徐々にそのコロナウイルスの性質が分かってきて、活動の可否判断もつくようになったが、感染が再度広がって、活動の自粛を余儀なくされ右往左往した感じでした。そして、今年いきなり会長ということで、このような東北地区盛岡大会にも来させていただきました。少しずつ活動できるものが広がって来ているのかなと思っております。山形県でもコロナ禍で何ができるのかと模索した高校もあります。小国高校という小規模校ですけれども、保護者と学校がZoom、オンラインで研修会を開いて、親もオンラインに慣れることが必要なのかなということで研修会を開いたそうです。その後、総会もオンライン併用ということで、すると参加人数が増えたという事例もありました。高校は広域から集まるので、保護者も学校に行って活動に参加するというのは今までも大変だったと思いますけれども、今後コロナが去ったとしてもオンライン参加がこれからの武器になれば参加率も増えるのかなと思いました。我が校でもなかなかオンラインは進んでいないのですが、その事例を聞いて今後できることがあればオンラインなども親が慣れて行くということが必要なのかなと思っております。

湊屋啓二　秋田県高P連前会長

昨日、全国の山田会長さんに秋田ナイトにお出でいただいて、大柏さんと2人、本当にありがとうございます。その中で山田会長様から言われた、「私より年上の方と初めてお会いしました」ということで、もう65歳になるんです。私も大柏さんと同じく子供が5人おります。

秋田県の場合は、やはり皆さんと同じように県の総会を2年間開けませんでした。しかし2年目の時に、このままではいけないと。誰が県の役員なのか、それだけはお知らせしないといけないということで、ICTを積極的に活用しましょうという話になりました。まず役員になった方々を、YouTubeを使って紹介することから始まりました。秋田県も70周年がありまして、Zoomを活用した県の三役会、役員会を開き、それがもう常態化し普通にZoom会議ができるようになりました。県の委員会にもこれが浸透して、各委員会、母親委員会もZoomを使って会議し、どんどん広がって最終的には100人規模で、ズームでの会議も行えたということで、これは非常に助かりました。Zoomはコロナのためだけでなく、豪雪等の気候が悪い時、わざわざ秋田市まで各地域から集まらなくてもいい。しかも時間も短縮できる。非常に私はズームの素晴らしさに感動した1年でした。段階的にそれを取り入れまして、第一段階としてはYouTubeによる新役員の動画を配信し、その後第二段階としてはZoomを使って事務局長さん、あるいは補助の淡路さんにも入っていただいて、会

議をやる。それも年間で、全部で 12 回 Zoom 会議を行ないまして。そのおかげで 70 周年の準備も非常にスムーズに行えたということでした。コロナはもう本当に収まって欲しいんですけれども、先ほどコーディネーターの清水さんからもニューノーマル、これは我々どうやってコロナの中で、これからPTA活動を続けて行くかという課題を逆に投げかけられたわけです。知恵と行動力を持ってすれば、どんどん克服できるものだと昨年は実感させていただいた次第です。私はコロナを理由に活動が停滞するというのは一番良しとしない人間でしたので、やるためには皆で集まって、対面でやるためには、どういう対策をするかと。あるいはその事業をやるためにはどうするかということを前提に物事を考えて進めました。余談ですけども私、県の子ども会の会長もやっておりまして、昨年、自分の所の子ども会の事業は一つも中止せず全部行いました。しっかり感染予防対策をして取り組めば、そんなに恐れるものではないと思っております。

大柏良　岩手県高 P 連会長

すごいですね、湊屋さん。全てもうクリアしているのではないかというくらい。全部解決しちゃってるって思いました。オンラインでの会議というのが、まだ全然、岩手では馴染んでいなくて、そこはやっぱり慣れといいますか、こっちが使いこなせるようにならないとダメなのかな。ウェブでの会議の仕方の心得とか、あとは技術的な使い方とか、そういう所をちゃんとレクチャーを受けるのをPTAでもやった上で、上手くオンラインでの会議を使わなければいけないのかなと2年以上の年月で思いました。ただ、書面決議が多くなった中で、これ皆で集まってやらなくてもいい会議や総会なんじゃないのかなというのは、たくさんあることにも気づかされました。書面でやるべき会議と、会わないとやっぱり出て来ないアイディアってたくさんあると思うんですよ。飲み会もそうですけれども。書面的なもの、所謂、課題の可否を問うような討議は、書面なりオンラインでの会議でいいのかなと。集まって何かアイディアを出すのはなるべく対面でできるようになるといいのかなと最近思うようになりました。

あと、これは単Pのほうで、私がこの数か月で受けた相談の中で、一番どうしたらいいんだろうなと思ったのですが、うちの学校、盛岡一高では、変な行事がいっぱいあって、運動会の時には 10 年以上前に全国でも問題になったんですが、旧称土人踊り、体中に墨を塗ったくって盛岡市内を練り歩くという。毎年5月13日に運動会をやるのですが、そういう行事があって、コロナになってからは保護者に公開していない。今うちの息子が3年生なんですが、この3年間保護者はそれを見ることができていない。保護者から、3年間参加できなかったので、何とかPTAの力で参観できないだろうかという相談を受けて、校長先生とか副校長先生にお話をしたんですけれども、その時は中間試験が近かったことと、高総体の試合が翌週に迫っていたので、万が一何かあったらということで、やはり学校に行って父兄が見ることはできませんでした。学校でどんな行事があって、それをどうやって伝えたらいいかというのをもっと思い至って、映像で撮って YouTube で配信するとか、多分、湊屋さんとかはお茶の子さいさいでパパッとやってしまうんでしょうけれども。そういうことを考えつくのが素晴らしくて、実行できるのが素晴らしい。それをやるのがPTAの一つの役割であり、力量なのかなと思い知らされました。湊屋さんをはじめ皆さんの話を聞いていて、ウェブの会議もやっていないし、オンラインでの発信もしていないしというのがすごく反省点の2年半だったと思っております。

それから、屋外での PTA 活動の取り組みというのをコロナ禍の中でもずっと続けている学校があります。コロナがあってもPTAとしての役割を果たせるのかもというような活動があります。

その一つは、宮城県との県境一関市にある花泉高校さんですけれども、ここ僕、大好きなんです。こちらは餅文化圏で真夏のお餅つき。一生懸命、汗だくになりながら餅をついている地域の方々を花泉高校の応援団が応援するという非常に不思議な文化を持っている所でありまして。また、自然豊かな所で、草刈りをシビアな状況でやらなければいけないという。私、テレビの番組を作っているんですが、マタギさんを追っかける時に、絶対着用しなくてはならないような足の裏に鉄の鋲が入ってるガンショウっていう「スパイク長靴」を履いて、刈り払い機でガーンと草を刈る。すごい斜面なので落ちそうになりながらもやるんですけれども、それはコロナの中でも継続してやって来たと。チームを組んでやる大変

な仕事なので、連携を取らないと接近して足を切ってしまうかもしれない作業です。そこの連携をしっかりした上で、一緒に汗をかく。こういう方々がPTAにいるということが分かりました。新しい方法ではないんですけれども、そういう活動は続けられるのかなあと思いました。

先ほど秋田の湊屋さんもおっしゃいましたけれども、きちんと対策を取れば、いろんな行事をすることは可能だと。子供会の行事を一つも中止せずにやれたといいうお話がありましたけれども、そういう気概と細心の注意を払ってやって行くということが次につながるのかなあと思っております。

清水成樹

はい、ありがとうございました。同じスタッフTシャツを着てるので、ダブルコーディネーターでやっている感じですが。よく県内でもアンケートを取ると、コロナ禍でのPTA活動の成功事例を教えて欲しいと要望を聞きます。なるほどねっていうところまではまだ行き着いてないんですよ。皆、模索中。そしてコロナで我々の最大の武器の一つでもある「集まる」、「集まって直接コミュニケーションをとる」という場が奪われて、現在も工夫しながらやれることはやる、やれないことはやれないというところだと思います。

一つ言えるのは、このコロナで我々はもしかしたら従来の、今までやってきたPTAの延長線上ではなく、ここで一つPTAを見直す良い機会に立ってるんじゃないかなと思っています。例えば総会も書面会議が殆どだったではないですか。思い出すのは令和2年のコロナ元年、僕たちその時の会長さんとは、Zoom はまだ浸透していなかったので、LINE のグループ通話を利用して夜、ビールを片手に情報交換をしました。2月の後半から全国一斉休校があり、岩手では入学式からスタートできたんですけど、宮城をはじめ山形とか福島とか入学式すらできないとか。あと学校でクラスターが、学校関係者に感染者が出たがためにスタートがゴールデンウィーク明けになったとか。役員決めもなかなかできないということも、実はそういう情報ツールを上手く使って各県の様子が分かりました。書面会議も今までなかった試み。

そして先ほどの話にもあった通り、今3年経って Zoom を使った会議だとか、いろんなやり取りがはじまっています。逆に Zoom を使うことによって、普段だったら参加率が 40%弱だったところが、今は 60 ～ 70%になっているとか。実は書面会議の返信率も 70 ～ 80%になっていて高い。ウィズコロナ、アフターコロナになってもできることとか応用できることっていうのは、たくさんあるんじゃないかなあと感じているところもあります。

ソーシャルディスタンスという観点からすると、コロナ元年にこんな高校がありました。盛岡の不来方高校という、音楽部が全国で何年も連続金賞を取っている有名な学校です。母の日に「お母さんありがとう」というリサイタルを、部員のお母さんたちを呼んでなんと「プール」で披露したという。プールの反対側で生徒たちが歌い、その反対側でお母さんたちが聞く。そうすると飛沫飛ばないよね、という工夫をした。また、老人ホームの慰問もやったそうです。生徒たちは駐車場、観客は病室、自分の部屋から窓を開けて。定期演奏会も3回に分散して開催したとか。学校の音楽部として取り組んだというこれらの事例を聞いた時に、ああなるほどなあと。コロナだから何もできないではなくて、できる努力工夫というのはギリギリまでしていいんだなっていう勇気をもらって、それを県内のいろんな会長さんたちに発信したことを思い出しました。

ウィズコロナ、おそらく、これからの活動に正解は無いが、これまでの運動、全国とか東北地区とか県とかの何か押し付けとかではなくて、各単Pがそれぞれもっと独自の、「こんなことやれるかな」、「あんなことやれるかな」っていう良いきっかけ、チャンスになるんじゃないかなと思います。正解を導き出すとかっていう発想ではなくて、自分たちで答えを作って行くっていう作業が必要になってくるんじゃないかなと思っています。

そんな中で、従来の健全育成でいくと、朝の挨拶とか、自転車マナー、自転車の指導だとか、マナーアップ向上運動みたいな従来の路線とはまたちょっと違う切り口を今日は、考えてみたいと思います。

話題提供の一つとして、教職員の働き方改革という切り口からお話して行きたいと思います。一昨年、令和2年、岩

手県高P連は 70 周年を迎えました。秋田さんも 70 周年をやられたと思うんですけど、実は1年延期して昨年に 70 周年記念式典を挙行させていただきました。もちろん規模は縮小。祝賀会は無し。その代り茶話会といってコーヒーとケーキでお祝をするという会を開きました。

その際、私の最後の仕事でしたので、いろんな過去の周年誌を紐解きました。実は昭和、教育基本法と同じ時期に新学校教育法で今の6・3・3・4年制ができた年です。やはり保護者の会が必要ということで、おそらく古い高校だと昭和 23 年に各校でPTAができたという記載がありました。それから3年後、昭和 26 年に各県の連合会、というのは学校の先生たちの待遇改善。高校の教育振興の問題解決には学校の先生たちだけでは無理、大変だということで、親もそこに関わろうということでできたのが各県の連合会なんです。その最初が岩手県。そして岩手県から東北全部に声を掛けて、そうだそうだということで全国の組織ができたというのが高P連の歴史です。ですから全国高P連の成り立ちには、この岩手はもとより東北の力というのが実はかなり強くあります。

その中で、当時は高校進学率が約 39%。今はと言うと 99%なんですよ。ですから大学を出て学校の先生になりたいという人は、小学校、中学校に人気がある。大学は大学で、専門分野をやる。高校の待遇が低かったというところで、何とかもっと魅力ある、進学率を上げて行こうという運動から始まったのが、PTAのスタートだということ。僕も会社の経営者ですけど、いろんな意味で働き方改革というのは世の中の流れになっていて、実はこの学校の先生たちもご多分に漏れないんだというところで。

これから宮城の尾形さんあたりも、アフターコロナにPTA活動を活発にして行くべきなのか、いやそれともオンラインだとか簡素化したほうがいいのかなんていう悩みを打ち明けてくれましたので、ちょっとだけでも教師の、働き方改革にもPTAで考えてみる、そんな切り口もあるんじゃないかなあということで話題提供したいと思います。まずは岩手でそんな事例ありますか。

大柏良

電話対応の時間を5時半になったらもう留守番電話に切り換えて。結構多くの学校が今そうなっているのかな。たまに6時くらいにかけても出てくれる、まだ改革が行き届いてない学校もありますけれども。そのような細かい部分、やっていたりしますね。

尾形直也

私のほうでも、やはり教職員が担当教科の他にも部活の顧問だったり、それに加えてPTAの業務というのがすごい重荷になってるんじゃないのかな、負荷がかかってるのかなという感じはします。PTA活動をすればするほど負荷がかかってしまうのかなあという気持ちでいるので、そこがちょっと難しいところなのかなと思います。

清水成樹

はい、これに答えは無いんですけど、ぜひぜひそんな観点、今まで無かった方もいるんじゃないかなと思うんですけど。これは世の中の大きい流れで、例えば個別に学校に対応とかっていうと、その分の負担が増えたり。そういう意味では上手くその間にPTAが入るとか。例えば、こんな例も。昨日の打合せで、山形の坂本さんが言っていた、駐車場係が先生とか。

坂本健太郎

はい、ガイダンスとか、ちょっと親が集まる時っていうのは多々あると思うんですけれども、駐車場が少ないものですから、グランドに誘導する先生方が何人かいて誘導しているんですけれども。これもその一人一台以上車が無いと暮らせ

ない山形県ではあるんですが。

オンラインとかハイブリットというかたちで、質問どうですかと言っても、その場では多分質問は出なくて。それだったらオンラインで見る方は見てっていうことであれば、車の台数も減るわけなので、先生方が駐車場係というのも負担は減るのかなと思います。

清水成樹

そんな観点から、だからここはPTAでまかなえるよとか、ここはこうできるよなんていう動きも積極的に考えていいんじゃないかなあと思いました。県の連合会発祥の地、岩手にせっかくお越しいただきましたんで、ちょっとそんな切り口もご紹介させていただきました。

もう一つの切り口としては、先ほど知事の話にもありましたPTAの「P」と「T」というのは、「ペアレンツ」と「ティーチャー」、「保護者」と「先生」なんですけど、今ここに「C」、要は「コミュニティー」とか「地域」っていうキーワードが入って来ているように思います。

例えば、総合学習時間の中で地域の歴史だとか文化だとか、社会活動などを探るフィールドワークを取り入れている学校などが多いと思うんですけど、地域とつながっているPTA活動の活動事例が、これもまたちょうど山形の坂本さんになるんですけど、あるとお伺いしましたので、ご紹介いただけますか。

坂本健太郎

大会要項 15 ページにも地域側の活動としてちょっと載せております。皆さん、地域って言った時にどう思われますか。「P」であれば親の住んでいる所ということで、小ちゃなコミュニティー、町内会とか、それこそ小学校単位の所の、住んでいる所というのが地域という概念でイメージできると思うんですけれども、先生方は地域って言った時にどう思われますかね。怖いっていう思いもあるかもしれないんですけれども、親の所には地域があるっていう思いがあるのかもしれません。

山形県の私の所の新庄北高等学校というのは県北にありまして、秋田県と接している所です。1市4町3村のまとまった所が最上地域で、高校が7つあります。私立が1つと県立校が3つ、あとキャンパス校というので、小規模校がその高校の附属というかたちで、それが3つございまして、その高校のエリア全部が地域を学びに変えるということで、「新庄最上ジモト大学」という取り組みをしております。こちらググってもらえばいろんな所でSNSの発信をしています。これは全くの学校外の課外講座という位置づけです。コンセプトとしては地域の大人と高校生の本気の対話っていうものを中核にしております。カテゴリーとしてはキャリア、あとは体験、課題解決といったカテゴリーに分かれるんですけれども、地域には企業もございますし、防災とか、男女共同参画とか様々な課題と問題もあるんですけれども、それらをこの地域ってこういう所なんだよとまず高校時代に、卒業する前に知ってもらおうというプログラムです。

今年で6年目になるんですけれども、昨年の実績だと 36 プログラムありました。のべ参加人数が多分 900 人を超えております。全生徒が2千人ぐらいなので、のべ人数 900 人というのは、かなりの数だと思います。

コロナが直撃しまして、会って対話というのが本来普通だと思うんですけれども、事務局はもうオンラインに切り換えましょうと。学びは止めてはいけないということで、全部、基本オンラインに変えました。ただ、その時にまだ集まってもいいよというプログラムとか、場所によってはそういう対面というのも残したんですけれども、それでも年々増えてます。参加人数も増えていまして、今年度令和4年は 44 のプログラムになっております。

なぜこういうことができるのかというのは、仕組みとしてコンソーシアムの体制を取っておりまして、行政、1市4町3村の首長さん方、あとは学校の校長先生、商工団体、農業法人など 22 団体がコンソーシアムを形成して、地域が応援団となって地域で学べますよということで高校生にプログラムを提供していると。そういう取り組みをしております。

清水成樹

はい、ありがとうございます。今の話を受けてどうでしょう、青森の須藤さん。地域っていうキーワードで、コミュニティースクールとか、何か青森でそんな例はありますか。

須藤久輝

はい、コミュニティースクールの話をしますと、実は青森県は、そんなにまだ浸透していないという話を聞いております。近くに養護学校さんがありまして、そこが県のモデル校として3年ぐらい前に始めて、文部科学大臣賞かな、何かすごく表彰されたりしていると。昨年度からは県立高校さんで始めたよというような話で、着々とは進んでいるんでしょうけれど、まだ進んでいない状況にあると。

ちょっと地域の話をしますと、いま青森県は子どもたちも少なくなっているので、定員割れする高校がすごく多くて、今学校再編みたいな、県のほうで進めていると。やはり町村部の学校が少しずつなくなっていくというのは、おそらく地域の衰退に大きくつながると考えています。

市部には残っていくということを考えると、町村部の地区のことを少し考えてしまうところがあるんです。そういう時にコミュニティースクールみたいなものがあって、例えば町村部には高校が無くなった場合、自分の住んでいる地元から市部の高校へ通うわけですから、子どもたちをどんどん地域に出向かせるというような、この先アフターコロナに向かって行くにあたって、まずウィズコロナというところでは、そういうつながりがすごく大事なのかなあということで、高校と地域ももっともっとつなげて行きたいなと思っています。

清水成樹

はい、ありがとうございます。他に発言されたい方いらっしゃいますか。

本大会の総合司会である菅原まゆみさんの盛岡四高ではPTAが主催して、地元で会社経営や社会活動など活躍しているOB、OGを講師に社会人講座を開き、社会人としての心構えとか、今こんなことをやっているよということを長年生徒に伝えている、という話もあります。学校や保護者だけではなくて、地域とかの観点でも見てみると、また違うアプローチができるのかなと。

今、岩手県の例で、「少子化で学校の再編とか廃校」という反面、地域の小規模学校の一つの存続、活用の仕方ということで、「コミュニティースクール構想」というのを行政では持っています。もしかしたら単Pも上手くそういう行政の流れとか、各市町村の流れというかご相談すると、もうちょっとやれることが広がって行く可能性が今後あるのかなあと思いまして。

今までの、どちらかというとマナーアップとか環境整備とか自転車通学だとか進学就職とか、あと広報紙の充実という従来の流れから、せっかくコロナでできなかったんだけど、そこで得た財産というか、会えないんだったらZoomでとか、SNSを上手に活用してとか、ICT、上手くそういう機能を使って繋がるということをこの3年間で工夫しながら、まだ現在ももがいてると思いますので、だったらちょっと違う切り口でとか、さっきの働き方改革ではないですけど、学校とぎちっとタッグを組んでとか。

先ほど大柏さんの話によると、コロナで集まれないけど、外の環境整備だったらできるでしょということで、ひたすら環境整備に勤しんだ2年間だったという話ですよね。学校では、どういうことを欲しているかということを、やっぱり学校ときちっと、会長と校長先生はもう少し近く、頻繁に意見交換してもいいのかなとに思いました。

それで緊急アンケートです。各会長さんたちで、校長先生と携帯電話、もしくはLINEでちゃんとつながってるという人。はい、手を上げなかった方はつながってないんです。

実は私も副会長3年、会長2年やりました。盛岡一高の会長が大体岩手県の会長になりますので、副会長の時は会

長代行で、実はいろんな東北大会、全国大会に、校長先生と一緒に行脚するんですけど、私は3人の校長先生とお付き合いをさせていただきました。その3人の校長先生の携帯番号とLINEは必ず交換してました。そうすると、何かあった時に本当に役立つんですよ。

ぜひ会長さん、校長先生と近くなってください。今日お帰りの際に、会場入り口の大会看板のところで2人で写真を撮るんです。「これを送りたいのでLINE交換しませんか」でいいんですよ。

東北大会の目的というのは、この冊子に書いている通りなんですけど、僕はもう一つ裏のミッションがあるなあと。もちろん本題の、パンフレットの中に書いていること、その通りなんですけど、書かれていない裏ミッションが、昨日も秋田ナイトとか、福島ナイトとかあったようですけど、そういう地元を離れた非日常の道中だとか、そこで一緒に違う文化とか空気に触れながら、同じ共通言語をつくるというか、同じ共通財産、共通の思い出をつくる中で、身近に感じるとか、その何気ない一言とか、近づけるいいチャンスの提供というのも、僕は裏ミッションであるんじゃないかなと思っています。多分並ぶかもしれないし、このTシャツを着た人に「すみませーん、写真撮ってください」と言って、ぜひ写真を撮って、それをきっかけにLINE交換とかして、密になってもらえればいいなと思います。

あともうひとつ話題提供ということで、ここからちょっとフリーなんですけど、これだけは伝えたいなとか、こんなことPTAでできないかななんていう話題があったら…。それでは福島の原さん。まだ会長なりたてで、赤裸々に言っていましたが、何かないですかね。

原正幸

はい、ありがとうございます。そうですね。やっぱり人が集ることがどれだけ大事なのかって本当に分かりました。昨日、福島県の皆さんで集まりました。だから単Pの校長先生とはLINEがつながってないんですけど、他の校長先生とは昨日つながりました。帰ったら単Pの校長先生ともLINEをつなげて行ければなと思っております。

あとは一人一人、意見をぶつけて行くのをどんどん活発にして行くっていうのが一番大事なのかなと思っております。何を考えて、どういう人なのかが分からないと、やっぱり何を話していても伝わらないというのがありますので、こういった場をどんどん増やして、そして地域の皆さんと共に子供たちの健全育成に努めて行ければなと思っております。

小中学校は地域が出来上がっており、学区があるので、地域の人たちとの連携がしやすいんですけど、高校になってしまうと通学範囲が広いので、なかなか地域の人たちを巻き込んでというのも無いと思います。そういった中で時代と共に、先生たちの働く環境も変わって来ると思いますので、我々保護者と先生方と地域と共に高校生で、高校生だけではなく小中高の子どもたちを、立派に自立した大人に育てて行ければなと思っていますので、私も勉強します。

小学校の時もPTA会長をやって、「PTAっていらないんじゃないですかね」って青年会議所の先輩に言ったら、ずっとそこから1ヶ月、2ヶ月とお叱りを受けて。未だにPTAって何が正解なのかなってずっと模索してるような状態なので、正解はおそらく無いと思うんですけど、ここにいる皆さんと共に、その正解をしっかり求めて行ければなと思っております。がんばります。よろしくお願いします。

清水成樹

はい、あと皆さんの前でぜひとも披露したいなとか、話題提供したいなっていうことがありましたら。じゃあ大柏さん。

大柏良

さっきの地域の話の中で、もうちょっとお聞きしたいことが。坂本さん、地域探究部の外部コーチやってるんですか。

坂本健太郎

はい、部活動がありまして、地域に出て、地域探究部っていう名前で、外部コーチを拝命しております。

大柏良

さっき地域っていうキーワードで、原さんからもありましたが、小中学校はすごく地域と密接なんですけれども、高校っていろんな所から通学しており地域のことを知ったり、地域の人との関わりを持つことが少なかったりするのかなあと思います。高校としての地域との関わり方というのは、「総合の探求の時間」との親和性があるのかなと思っていまして。もし皆さんの学校でそういった探究的な取り組み、地域との関わりをやっている事例があったらお伺いしたいなと思ったのですが、何かやってらっしゃいませんか。

須藤久輝

本校には、「じゃわめき隊」という隊がありまして、これは「部活動じゃわめき隊」です。部活動ではないんですけど、部活動をやりながら地域に出て、いろんなことを奉仕しています。五所川原市には赤いリンゴというどこを切っても真赤なリンゴがあるので、そのリンゴを使った「おやき」を本校では売りにしたりして、いろんな地域に出て行こうと。ボランティアではないんですけども、そんなことをしながら出向く子どもたちが何人かいて、やっぱり出向いて行くと、子どもたちの意識も変って行くんですよね。中にいるだけではなくて、これはすごくいい活動だなと。近くの高校にも実は似たような活動が何校かありまして、五所川原の市役所に一同に会して発表会をする場もあったりと。そういうことで五所川原も良い取り組みをしてるのかなと思っています。

湊屋啓二

私の高校では、地域との関わりという点では、普通科が4クラス、実業科が2クラスありまして、栽培した花をですね、苗、これを地域の方々に売りに歩いているんですよ。非常に好評で、あっという間に毎回売り切れるということで、これはそういった実業的な科の良さだなと思います。

私がPTA会長をやっておりました時は、地域に愛される生徒、あるいは学校であって欲しいということを常々子どもたち、あるいは学校の先生たちの前で申し上げておりました。大上段に構えるのではなくて、例えば挨拶、マナーアップ運動、これもすごく地域の方々に、子どもたちの評価という意味、それと地域の方々と声を交わすという意味では大事なことだと思うんです。ですから挨拶運動というのは単に儀礼的に形式的にやるのではなくて、地域に溶け込む一つの大事な運動だと思っております。

例えばコミュニティースクールと大上段に構えなくても、挨拶運動とかマナーアップ運動を通じて、地域の方とのコミュニケーションをとにかく子どもたちに取っていただく。そうしてまた地域の方々も、そういう生徒たちが可愛いなと思うと、いろいろ意見してくださる。そういったことがやはりコミュニティーづくりだと私は思っています。

秋田県では、コミュニティースクールをやっているのは3校しかないんですよ。比較的小規模校だし、秋田県では平成5年から「ふるさと教育」を県教委が中心にやっておりまして、ふるさとの良さを子どもたちに教える。そしてまた地域の方々が子どもたちとの接点を持つ。そういった教育をもう既にやっておりまして。今流行りでコミュニティースクールっていうのを多分やられて、これはこれで非常に素晴らしいことですし、取り組んでいる高校は非常に進んでいる。ワーキンググループをつくっていろんなジャンルで進めていて、大変いいんですけど、我々が直接取り組める、身近な所から取り組めるというのは、そういったことだと思うので、誰でもできることですから、とにかく地域の方々に子どもたちから挨拶をさせるということから始まってもいいんじゃないかなと考えております。

清水成樹

岩手の例で、僕の知ってる限り、学校名が間違っていたら申し訳ない。例えば盛岡商業さん。やっぱり商業高校なので自分たちで商品を開発したりだとか、仕入れて地元の商店街で実販してみるとか。あと盛岡農業さんだと、自分たちで作った野菜を文化祭の時に、要はもう地域の方々にもウェルカムで。ただコロナでなかなか外からというのがむずかしかったみたいですが、販売をすることで、実は大人気。県内でも来客数が大きい文化祭の一つになっています。

あとは実はリクルートさんから聞いた話だったんですけど、大船渡高校では地元学を学ぶと。卒業後、一旦大船渡を離れるけれども、高校のうちにきちっと地元の良いところとか文化とか歴史とか、そこの顔とか、そこの地理的なことも含めて知ってもらうことで、実はサケではないけれど外に行っても戻って来られるような土壌にしていきたいんだというような教育現場の取り組みも全国に紹介されてました。

最初は嫌々ながらだったとしても、いろんな人の話聞いたり、いろんなことを調べて行くにつれて、自分の地域、郷土に誇りを持てるようになったとか、やって良かったっていうような、そういう実例なんかもありました。

だから、いろんな所、地域と言ってもさっきの湊屋さんの話じゃないですけど、都心部にあるような、いろんな所から集まって来る所はなかなか地域っていうとピンと来ない。要は朝の運動、地域の人たちに路上駐車で迷惑をかけないとか。自転車の乗り方のマナーがとか、そういう地域もあれば、うちの町とか、市のたった1校しかない高校というと、もうちょっとその示す地域というのはまた違うでしょうし。またOG、OBを介在してですけど、地元に残っているOG、OBの力も上手く借りるというのも地域だなと思うし。だからいろんな学校とか、その置かれている立場とか状況で、いろんな地域というのが見えて来るかなと。

例えば岩手の浄法寺で、浄法寺高校さんが漆を採る作業を実演してとか、発表してとかっていう時も、やっぱり地域の方々にご協力を得ないと。地場産業ですので。そういうところの活用の仕方、もうおそらくやられている所が殆どだと思うんですけど、もしかしたら今、せっかくコロナで次何やろうかなとか、次の展開と言った時に、もし地域というキーワードとか見方、先生たちの働き方改革なども、何とかPTAで支援できないかなとか、そんな視点もどこかで覚えておいてもらえればいいなと思います。

尾形直也

ちょっと考えていたのは、私もPTAの会長となりましたが、実際他県の、同じような工業高校の学校のPTAの会長さんは、どのようなことされているのか。PTA会長さんだけの中味がもっと意見交換できる何かツールというものは存在はしてないですか。

清水成樹

どうでしょうね。岩手県内ですと、PTAは介在しないんですけど、産業教育振興会、ってありますよね。実は岩手の高P連の会長もそこの副会長だったりするんですけど、そこで県内の実業高校の集まりはありますが、そこは校長先生、生徒は関わってるんですけど、PTAは関わってなかったりとか、その存在を知らないというのがあります。だからこれは逆に言うと、今年の各県の会長に…。そんな切り口があってもいいですよね。

原正幸

そうですね。進学校とあと工業高校、商業高校、カテゴリー的に集まる機会をつくったほうが絶対いいと思いますね。何でもかんでも会長さんがとかではなくて、その担当毎の組織づくりを担っていけば、さらによりいい組織づくりが間違いなくできると思います。

清水成樹

はい、おそらく事務局の先生たちも聞いていると思いますので、これ以上僕は言いませんが、いろんな切り口があるんじゃないかなと思います。だから例えば大規模校とか、進学校とか、あと進学、就職半分半分とか。普通高校だけど地域の小規模校とか、実業高校とか。実業高校も一括りにするなとか言われるんだったら工業とか、商工とかなっていたりするし。水産高校とかは、どこのカテゴリーみたいな…。

一つ正解云々とかではなくて、いろんな切り口で、そういう集まりというか、そういうカテゴリーで会を開くとか。そうすると大体東北の人数くらいがいいかもしれないですよね。もしかしたら県内の、そのあたりの流れというのはすぐにできるかもしれないですね。できることから。各県連の会長さんも聞いてますので、やってみるとか。

要は東北の、さっき委員長さんという話があったんですけど、例えば健全育成委員会の所で各○○部会みたいなかたちで展開できたりすると面白かったりしますよね。

だんだん時間も差し迫ってはまいりましたが、これは言い足りないとかありますか。

坂本健太郎

せっかくなので。保護者の方から言われたことなんですけれども、今の高校生って校歌歌えますかということを言われて、やっぱり止まってしまったんですね。私が高校の時は強制的に校歌というものは、怖い先輩が教えてくれたというのもあって。同窓会とかでも必ず歌う。やっぱり学校を卒業したアイデンティティーとして校歌ってあると思うんですけれども、今、校歌も全部CDで流して、多分歌っていないというか、歌えるのかなっていう不安があって。歌っているのを聞いたことがないので。それについて、もし何か知見というか、自校でもし感じていることがあれば教えていただきたいなと思いました。

大柏良

うちの学校は特殊すぎて。応援歌 10 番まで全部覚えて。覚えていないと、今は無いけど前のほうに連れて行かれて、踏んだり蹴ったり…。まあ踏んだり蹴ったりはされないけど、ものすごい応援歌練習をやって来たので、もう叩き込まれてはいますけど。

確かに今の高校生たちは、今年はやっていますけど、去年とか応援歌練習ができなくて、やっぱり校歌も応援歌も歌えない世代がいるのかな。よく校長先生もお話してくれるんですけど、校歌もそうなんですけれども、今まで先輩たちが築いて来たものを僕たちはちゃんと受け継げているのかが分からなくて不安ですと言っている子はたくさんいます。うちの学校の場合は幸いなことに、今年、応援歌練習が復活しまして。私も現役時代はすごく嫌な時間だったんですけれども・・・。根性注入タイムがまた復活したので、後輩たちのそういった部分は心配してないんですけれども。すみません、そんな根性論ばっかりで体系的な話はできてないんですけれども。どうですか、皆さんは、そのあたり。それこそ入学式とか卒業式の時、歌ったんですか、今年。

清水成樹

同窓会なんかに行くと、古い先輩と世代は違っても共通財産。高校の中味だとかカリキュラムって若干変ってはいるんですけど、やっぱり校歌とかは、そこで繋ぐ一つのツールですね。ただテンポが違いました。昔の先輩たちはゆっくりなんですけど、僕たちはちょっと速くなってます。せっかちになってるんですかね。

本来であればいつもの東北大会の研究協議というのは、各県持ち回りでPTAの事例発表する時間だったんですよ。だけど今年新しい試みで、2年間なかなか何もやってませんという発表を 90 分できないだろうということで、それならば無いは無いなりに次の展望とか、ヒントとか、少しでも持ち帰ってもらえるように、今日はこういうパネルディスカッションという

形式を取らせていただきました。

湊屋啓二

私はやはり、よく言われる話なんだけども、できない言い訳ってあまりしたくないんですよ。「これをやろう」と言うと、「いや、これだからできない」、「やめたほうがいいんじゃないですか」っていう方が必ず一人や二人いるんですけど、そういったことをやってますと前に進めないんですね。PTAで今やれることは確実にやる、ということがやっぱり大事です。

もう一つ自分の信条としておりますのは、前例に捉われない。前の年にこれをやったから今年もこれ。それはそれでいい面もあるんだけど、やはり旧態然として今の時代に合っていない可能性がありますし、あるいは生徒の考え方というのはもう日進月歩ですから。もしかすると、そういったものに合致しないPTA活動をやっている可能性もあるんですね。ですから、前の年はやったけれど、今年もこれでいいのかって、一回はやはり検証するということが大事だと思うんです。

皆さん同じ考えだと思うんですけれども、やはり生徒たちのために、自分たちの子どもたちのために、そして学校のためにやるのがPTA活動ですから。そこはもう一回、原点に立ち返って、本当にこの活動が、事業がいいのか。やっていいものなのか。そしてやるべきなのかということを検証してみる。そういうことは大事じゃないかなと思っています。

何よりも大事だというのは、昨日も12時過ぎまで病を押して頑張っていましたけれども、やはり情報交換を早く復活することですね。東北人というのはお酒飲んでコミュニケーションを取らないとなかなか親密になれないというか、やはりコミュニケーションを取るための一番いい手段がやっぱりお酒なんですね。飲まなくてもその場に、好きだっていう方もいっぱいいらっしゃいますし、ぜひコロナが早く落ち着いて、皆さんとゆっくりお酒の場を通じて、いろんな話ができることを切に願っておりますし、多分そうなると思いますので、ぜひ残された皆さん、私は先に行きますけど頑張ってください。ありがとうございます。

清水成樹

はい、ありがとうございました。多分この親世代、今の親が昭和生まれが最後ぐらいかな、そろそろ平成生まれの保護者が入って来るんじゃないかなと思うんですけど。昭和生まれ、我々の時代というのは、ちょっと変わったことすると、皆と一緒とか、皆と一緒じゃなきゃダメだみたいな、チームワークで、輪を乱すなみたいな。制服、格好から何から流行なんかも一緒に追いかけて来たかなと思うんですけど。

実はその昭和生まれの我々が平成という時を経て、今、令和になって、やっぱり昭和と全然違うなというのは多分皆さんもお気づきで。だから我々の育って来た時の常識というのはニューノーマルと同じ考えで、その時代その時代でつくっていくものだなと思うのですが。

やっぱり自分というものは皆違って皆いい時代で、その代わり自分というものをきちっと持たなければならないとていう、違う宿題があるというか、そんな時代になってます。

その中でPTAというのは、先ほどから言っている通り、「P」と「T」、時々「C」も上手く巻き込んで欲しいんですが、「P」と「T」、「親」と「教師」の会であります。学校教育と家庭教育の両輪で進んで行くというところでは、これからもきちっと学校と連携を取って欲しいなと思いますし、僕が常日頃言ってるのは、「高校とは」と。「高校とは何だ」という問いに対しては今まで、中学校、小学校まで夢だった、あれになりたいこれになりたいという夢だったものを現実のものとして目標に置き換える場だと。そして多様な価値観、いろんな仲間だとか先生とか書物もそうですし、教科もそうなんですけど、いろんな価値観に触れながら自分の可能性と方向性を定める場。就職するか進学するか、どんな大学に行くか。その第一歩を踏み出す場が高校であると私はいつもそう捉えています。

その場、環境を陰で、時には日向で支えて行くのが保護者の務め。言ってみればPTAというのは、僕は道具だと思っています。道具、ツールです。主役は生徒。その代り、その道具というのは、その時代時代、いろんなその時必要な

道具に変化して行かなければならないんじゃないかなと思います。

さっき話した昭和 23 年からのPTAの成り立ちで、今、令和4年。その時代その時代、いろんな道具に姿を変え、形を変え、自分たちの道具を磨いてきたはずなので、これからもいろんな諸課題、いろんな問題が山積して来ると思います。環境の変化ももっともっとスピードを速めて行くと思います。

PTA活動を続けるために何かをやるのではなく、その時代その時代必要な道具であることが結果的に持続可能なPTAだということ。PTAという道具を皆で活用していきましょう。そんなことを今日皆で共通認識として持っていただいて、ぜひぜひ各校のこれからの頑張りを各県の会長さんに伝えてもらって、各県の会長さんは東北で伝えてもらって、それを受けて、また県内で広めてもらって、いろんな所でそんなプラットホームな東北の仲間でありたいと思います。

ちょうど時間となりました。皆さんお役に立てましたでしょうか。つたないコーディネートにお付き合いいただきました。パネリストの皆さん、会場の皆さんありがとうございました。これで終わりたいと思います。

記念講演

「南部美人の挑戦」

～地域を照らす光になるために～

株式会社南部美人
代表取締役社長（五代目蔵元）
東京農業大学客員教授

久慈 浩介氏

久慈浩介氏　ただいまご紹介いただきました盛岡から車で１時間、新幹線で 22 分、北の方に行った岩手県二戸市で、「南部美人」というお酒を造っております5代蔵元の久慈浩介です。今日は岩手県に、そして盛岡にお出でいただきまして誠にありがとうございます。

そしてもう1つお礼。私、岩手県の酒造組合の副会長という立場もありまして、昨日は皆さん、街に出掛けてたくさん岩手の酒を飲んでいただきまして、ありがとうございます。

山形から来ている私の同級生の高橋淳一郎君だったり、福島から来ている二戸の私の仲間の三ケ森さんから、他にもいっぱい来たんですが、「乾杯してるよ。岩手の酒最高だよ」という連絡がありました。もうそれだけで私は非常に嬉しく思いました。本来なら昨日レセプションがある予定で、そこで「南部美人」も死ぬほど飲んでいただこうと思っていたんですが、岩手のお酒を昨日はいっぱい飲んでいただいたので、それはそれで良かったかなと思っておりました。

今日は1時間余りの時間をいただきまして、私がやっている挑戦、こんなことをやっていますよ、というお話をさせていただきます。皆さん学校関係者にとっては参考になるかわかりませんが、地域づくりだったり、様々な町の良さを伸ばして行くみたいな話にはつながっていくと思いますので、どうぞお時間をいただければと思います。本来ならば試飲をして飲みながらやりたかったのですが、それはまた今度別の機会でと思っておりました。

まず私の蔵と二戸市の説明をさせてください。地図にあるとおり、青森との県境です。二戸市は人口 26,000 人の小さい町です。そこで「南部美人」は 1902 年創業ですので、今年 2022 年は創立 120 周年ということで記念の年になります。

二戸市は小さい町なんですけれども、実は日本一の産業が1つあります。これが漆です。生漆の生産量が日本一ということで、日本で使われている漆の9割が中国産。残り1割の国産漆の中の約 70 パーセント近くが二戸市で生産されている。その生漆は漆器とかにももちろん使われるのですが、それ以上に文化財や国宝の修繕といったものに現在では使われていて、今は全く足りない状態です。日本の伝統産業を支える二戸の漆を我々は誇りを持って伝えていかなければいけないなと思っています。

それで、「南部美人」のお酒の名前は、南部藩の南部の土地で美しい酒を造りたいという願いを込めて「南部美

人」というふうに私の祖父が命名させていただきました。

実際、モンドセレクションや様々いろいろなところで賞をいただいておりますが、その中でも2017年には世界一のお酒を決めるインターナショナルワインチャレンジ・サケ部門というところで、1245点のお酒の中から見事世界一、チャンピオン・サケを受賞させていただきました。実を言うと、青森と宮城以外はチャンピオン・サケを東北は結構出しているんです。山形は「出羽桜」が2回取っていますので、福島は「奥の松」さんと「からはし」さんが取っているという状況もあるので、岩手県ではうちしかまだ取っていませんが、東北は非常にこの世界一の称号を得る地域でもあるということで、東北のレベルの高さを示しているのもこのチャンピオン・サケになります。

ちなみに、日本のナショナルコンペティションでは、全国新酒鑑評会で福島が非常に成績が良くて連続日本一を取っていますけれど、東北という括りで見ると、もう12、13～4年ずっと日本一を続けている。だから東北の酒づくりがどれだけ今レベルが高く、日本中から注目されているかということがわかります。

2013年には、ユダヤ教の食事規定を満たす宗教上の許可コーシャの認定を取っております。日本酒では日本で2番目の認定になります。1番目は山口の「獺祭」さんです。

2019年には、世界で初めてビーガンの国際認定をいただきました。今、「南部美人」のお酒はオールビーガンということで、完全菜食主義者、世界中の完全菜食主義者6億人から8億人が安心して飲むことができるお酒として国際認定されております。

2020年には、遺伝子組み換えをしていない証明であるNON-GMOの認定を取得しております。現在ではアメリカ、イギリスをはじめ、世界55の国に輸出をしておりまして、これについては後で詳しくお話をしていきたいと思っております。

そんな「南部美人」は、初代から続く家訓というものが1つ残っておりまして、このたった1つの「品質一筋」という家訓をモットーに初代から5代目蔵元の私まで酒造りを、やらせていただいている。そんな中で5代目蔵元の私が目指すお酒はどういうお酒なのか。4代目とも3代目とも違う品質一筋をベースにして目指すお酒は、その名のとおり美しさを追求したお酒を、今現在、一生懸命やっております。麗しいだったり、雅だったり、凛だったり、こういった言葉を連想させるような「南部美人」。美しさ。「南部美人」だからこそ美しさに拘った酒造りをしています。

そのお酒を実現するためには、ここの書いてある4つのことをとても大事にして造っております。拘りの原料でつくります。そしてどこまでも機械じゃなくて手でつくる。手づくり、そして南部杜氏の技法をつかっていくんだと。手づくりするためには人財。あえて財産の財にしているのは、人は財産ということで、人財を非常に大事にしています。最後、青いところ。この冷蔵貯蔵というのは、まさに私の代になってから非常にお金も力もいっぱい入れている部分であり、管理をしっかりすることによって、皆様の手に届くときにお酒がフレッシュで、とても美しい形で届くようにということでやっております。こういう4つに力を入れてやっているのが今現在の「南部美人」ということになります。

そんな「南部美人」が挑戦している様々な挑戦を4つほど持って来ましたのでご覧いただければと思います。

まず1つはユニクロ。皆さん知っていますね。今日着ている方もいますよね。ユニクロとコラボしてTシャツをつくっちゃいました。2019年3月に、ユニクロさんからご連絡がありまして、ユニクロUTシリーズで日本の伝統ある酒蔵をモチーフにしたTシャツをつくりたいと。その中で全国から11の蔵元を選抜したのですが、ぜひ東北では「南部美人」さん参加してください。あと「出羽桜」さん、「浦霞」さんも入りますということでお声を掛けていただきました。最初、何言ってんのかな、と思ったんですけど、「南部美人」の銘柄やお酒づくりの伝統的な絵だったり、そういったものを使ってTシャツをユニクロがデザインして、世界販売したいというお話でした。「いや、そんな…、いいんですか?我々は何もできませんよ」という話をしたら、商標を使う許可をいただきたいということを言われまして、「もちろん」ということで出させていただきました。何よりも酒蔵をあのユニクロが選んでTシャツにするという、その事実自体がすごくて、我々はものすごく喜びました。その11の蔵に選ばれたということ自体が大変私たちもありがたく思っておりました。

これは、左上に書いてあるのがユニクロの11の蔵のデザイン。「デザインはユニクロで全部やります。文句言わない

でください」と言われたんですね。「はい、わかりました」。これ1枚売れたからって蔵元にバックマージンは１円も入りません。もちろんそんなものはいりません、という話をさせていただきました。

これは盛岡南イオンの中にあるユニクロなんですけど、各県での旗艦店では樽や空の瓶を貸し出したりして協力をさせていただきました。盛岡南イオンのユニクロでは、初日販売で 200 何十枚、うちの T シャツが売れたということで、記録的なヒットだったということでした。このユニクロの T シャツが世界販売、ニューヨークでもシンガポールでも、ロンドンでも売られましたけれども、最も売れた場所が成田空港と羽田空港にあるユニクロだったらしいです。そこでお土産として外国人がものすごく喜んで買って行ったということで、我々としては非常に嬉しかった。ちなみに僕は盛岡の駅や東京駅で何度か「南部美人」の T シャツを着た僕やうちの社員以外の人に会っております。僕も着ていますのでね、非常に親近感が湧いたんですけれども、そういう広がりが出てきた。酒蔵は酒蔵だけじゃなく、世界的な企業のユニクロとコラボして展開することもできるんだということが実証された１つの事例です。

うちでは、安くしてもらって 1000 枚買って社員全員に配って、今うちの作業服です。これお酒を造っているところ、麹を造っているところなんですけれども、作業着としてこれを着ながらやっております。色も、うちはこのオリーブ色だったので非常に使いやすいなと思っておりまして、私たちは挑戦をやってきてよかったなと思っておりました。酒蔵だけじゃ何もできないんですね。いろんな人の力があって初めて実現していくということでした。

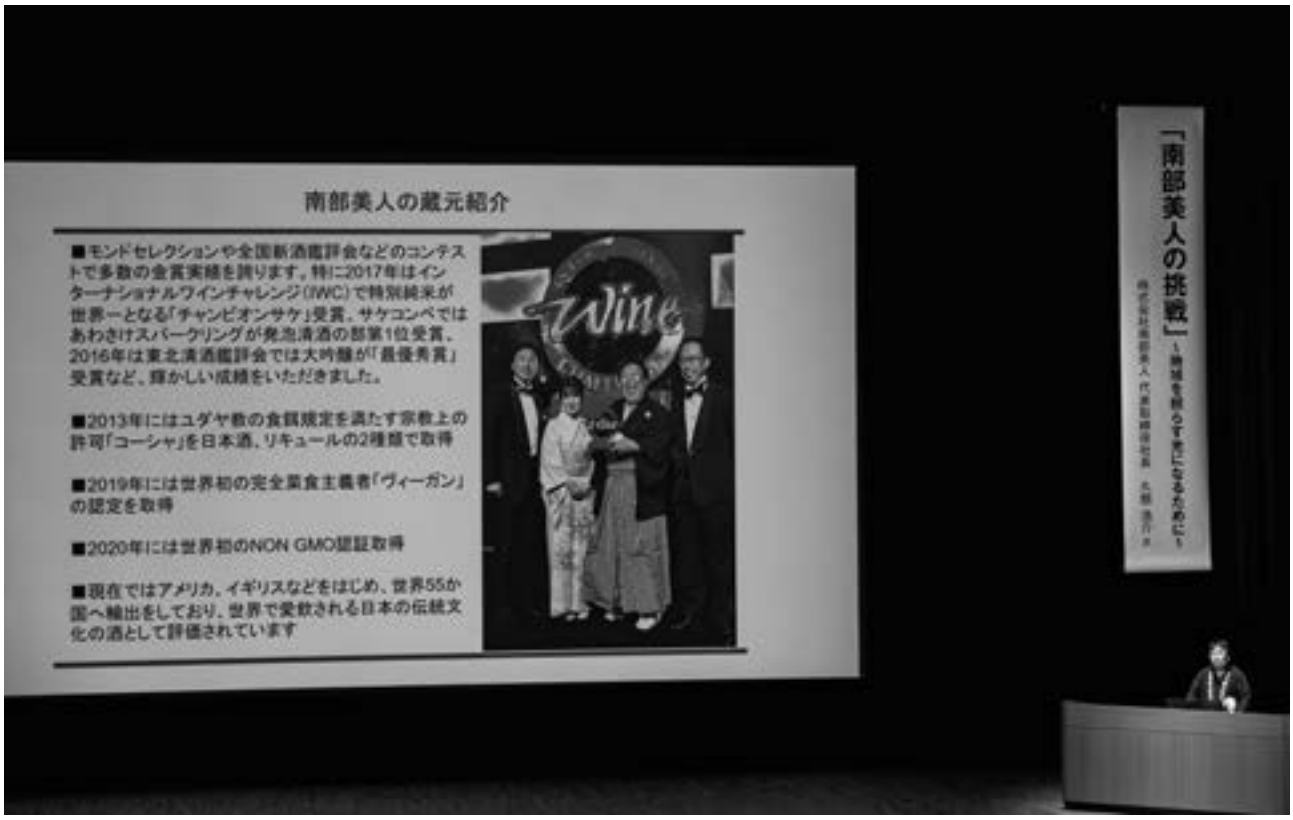
続いて2つ目。先ほどもちょっと紹介がありましたけれども、世界へ日本酒を、ということで、世界に挑戦しているお話をさせていただきたいと思っております。

まず、何でそもそも海外に挑戦するのか。最近だと皆「そうですよね」と言ってくれるのですが、私たちがやり始めた 1990 年代なんていうのは「何やっているんですか?」の世界だったんです。考えてみれば、この国の人口って僕が蔵に帰ってきたときからもう減っていくというのが統計上わかっていた。でも、90 年代にこの国の人口が減るからどうだなんていう議論にはなっていなかった。減ってきて初めて問題視する。ここは皆さんの業界でもたぶん一番大きな問題だと思うんですよね。だって生徒がいなくなるんだから。お客さんという言い方は変だけど、生徒がいなくなる。我々とすると飲む人がいなくなる。さらに口の数が減ってくる。もっと言うと、我々は二十歳未満の人たちにお酒は飲ませられませんので、高齢者の方々を含めると、人も減っていくし病気で飲めなくなる人はどんどん増えていく。そういったことを考えると、将来、この国での日本酒需要は絶対に減っていくということが当たり前にわかっていた。私が社長になるような時代には、間違いなく減っていくというのがわかっていた。

じゃあどうするのか。世界を見てみると、世界は日本酒を待っている。日本の健康志向の高まり等もあって、世界中の和食レストランが日本酒を待っているという確信を持っていました。なぜかというと、私が 17 歳の時、福岡高等学校2年生から3年生に上がる春休みの約1カ月。岩手県の選抜代表 20 名に選ばれて、アメリカのオクラホマ州のタルサ市というところに短期留学をさせていただきまして、そのときに体験したこと。これがやはり僕の人生を変えました。

私は、実は幼少のころは酒蔵を継ごうなんて思ってもいませんでした。皆さんと一緒で、学校の先生になりたかったんです。学校の先生になりたくて、高校2年生までは進路志望調査書に岩手大学教育学部と書いていました。このアメリカの留学を期にその考えがガラッと変わって、自分の家がやっていることってとんでもなく日本のアイデンティティを代表するもの、とんでもなく日本の誇りなのではないかということを海外で気付かされました。日本にいたらたぶん気付かなかった。なんだ、毎日飲んでるな、毎日酒臭いな。なんか知らないおっちゃん（杜氏さん）たちがいっぱい来て、なんで俺のプライベートはないのか。なんでその辺を歩いていればすぐにバレるんだとか、もう嫌なことばっかり、いろんなことばっかり思っていたけれど、そうじゃない。それがどれだけ素晴らしいことか、すごいことかというのをホームステイ先のお父さんに学ばせていただきました。

彼はこう言ったんですね。「浩介、お前は帰ったら当然酒蔵を継ぐんだろ?」と言われました。僕は「ノー、違う」と。「俺は学校の先生になるんだ」と言ったら、そのお父さんは「お前はバカか」と。「フランスに行ったらワイナリーのオー



ナーの息子だぞ。なりたくたってなれないんだぞ」と。しかもお土産にお酒を持って行っていますからね。「こんなおいしいお酒をつくる蔵に生まれて継がないなんて。お前のお父さんがどれだけお前のことを愛しているのかわかっているのか」って。「あのくそ親父は大して俺のことなんか愛してないと思うよ」と言うけれども、あのアメリカのお父さんたちは学校へ行くときには必ずハグとキスで送り出すんですよね。男の俺でも。そういうふうにして、家族の愛なんていうのは、僕はあんまり日本にいて経験したことがなかったので、そのお父さんに「浩介、お前が継がないで誰が継ぐ。お前にしかできないことをやりなさい」と言われて、1カ月も一緒に暮らして毎日言われたら、なるほどそりゃそうだな、と思うようになるんですよ。

それで帰って来て東京農業大学醸造学科。うちの親父が行った大学ですけど、調べてみたらなんとですね理科の先生になれる、教職が取れると当時の赤本に書いてあったんですよ。ここに行ったら二兎を得る、ということで、邪な気持ちで行ったんですけど、今度は酒蔵の仲間や楽しい仲間、今日の山形の高橋淳一郎君はじめ、発酵関係の楽しい仲間たちに囲まれて学校の先生なんていうことはスポーンと抜けてしまいまして、すっかり酒蔵になってしまいました。それで蔵を継ぐと決めて今に至っています。

実は祖父、父、私と続く発展する「南部美人」の販売経路ということで、祖父が当時二戸市でしか飲まれていなかった「南部美人」を盛岡の川徳デパートに並べて、岩手の「南部美人」にしていった。父は、当時、岩手でしか飲まれていなかった「南部美人」を初めて東京に持って行って銀座三越等に並べて、そこから今は北海道から沖縄まで販売販路を展開する日本の「南部美人」になった。じゃあ私は何をするのか。国内消費は今後伸びる可能性は低い。世界で日本の食文化は評価され始めている。日本酒は世界中で日本にしかないオンリーワンのもの。最近は海外でも造っていますけれども、日本酒としては造れないんですね。サケとしてしかつくれませんので、オンリーワンのもの。そして、日本酒で世界に挑戦しようと決意しました。

でも、1人じゃ何もできないんですね。当時の 20 代の私は。力がなくて。だから、何をしようかと思っているときに、先輩の蔵元、島根県にある李白という蔵の田中前社長。お亡くなりになりましたけれども、田中前社長。そして大阪にある

利休梅というお酒をつくっている大門酒造の大門社長。その2人を中心にしてお声を掛けていただいて、まずは日本酒全体を世界に広げていこうじゃないか、ということを提案していただいて、1997 年の 10 月1日に日本酒輸出協会をつくりました。

この協会は何をするかというと、例えるとサッカーを全く知らない国に行ってスパイクはナイキがいいよ、ボールはアディダスがいいよ、みたいなことを言っても、サッカーを知らない国では「何言ってんだ、お前は」ということになるわけですね。じゃあ、どうするか。サッカーを知らない国で物を売ろうと思ったら、まずサッカーを知って楽しんでもらおうとしますよね。サッカーっておもしろいなあ、サッカーってすごいなあ、すごく楽しいなあと思ったら、なんか裸足でやっていたらすごくやりづらいとなったら、実はスパイクを履けばいいんだよ。スパイクだったらナイキがいいよ。なんかこれ蹴鞠みたいですごくボールが変だ、といったら、ボールはアディダスがいいよ、とか、そういう言い方をしていく。

つまり日本酒も、今では当たり前ですけれども、当時は東洋の変な、小さな国の謎な飲み物だったんですよ。それを世界で売っていこう、飲んでもらおうと思ったら、それをまず伝えていかなければいけない。「南部美人」を売るとか「出羽桜」を売るとか、そんなことは何言ったって意味がわからない。まずは日本酒全体を知ってもらって、楽しんでもらって喜んでもらわなければいけない。それをやれるのは誰なんですか。ソムリエですか、インポーターですか、オピニオンリーダーですか、違います。誰もそんなことはできない。唯一世界で日本酒の楽しさ、すばらしさを伝えられるのは、造っている蔵元しかないんです。その蔵元が自ら足を世界に運び、自らの口で下手くそな英語で伝えていく。日本酒の魅力を伝えていく。その魅力を知ってもらって、そこから初めて銘柄の選定に入ってくる。そのための地ならしをしていった。例えてみるならば、何もない大草原に道をつける作業です。誰も何もやっていないところをやれるのは蔵元しかないでしょう。そこに道をつけていったのがこの日本酒輸出協会になります。それが今では多くの蔵元がそこを通り、日本政府の支援が入り、高速道路になりました。正しいほうに道が行っていたから修正しなくて済んだのですが、我々が歩んだ道がそういうふうに今なっているという状況です。

そして、そこを境に「南部美人」は輸出をスタートさせて、今現在はこれらの国に行っています。55 の国です。これをぱっと見てわかりますか。ザンビア、アフリカですね。例えばコロンビア、エクアドル、中南米ですね。そういったところにも今は日本酒が行っている。人類が住む大陸全てにうちの酒は今行っています。唯一、大陸として行っていないのが、南極大陸だけです。今、南極大陸にも持って行こうと思って様々お話をしておりますので、またそういうビッグニュースが出たらぜひ注目していただければと思っております。

現在、我々のお酒の生産量の約 35%から 40%ぐらいが、海外への出荷になっております。とてつもない数字です。もうおそらくあと3年ぐらいで 50%を超えます。しかもこれコロナの前の数字に比べてですからね。コロナ前の数字の日本国内の数字と比べてこの数字です。コロナ禍の数字と比べたらもうちょっと高くなるんですが、今、国内も戻ってきていますので、間違いなくこれからどんどん増えていくと思っております。

じゃあ、どういうことをしているかと言ったら、この2つの繰り返しです。まず頭で味わってもらう。そしてその後に舌で味わってもらう。頭で味わわないと日本酒ってわからないんですよ。皆さんもそうですけれども、アフリカの奥地に行って、歓迎の料理がポンと目の前に出されて、「さあ、食べてください」といったときに、「えーと、これは何でしょうか」となりますよね。だから説明が必要なんです。あの当時の東洋の小さな国の酒は何なんだ、という感覚のほうが強いから。それを説明しなければいけない。その説明に時間がかかる。そして味わってもらう。これのもう繰り返しです。日本国内だと、この1番がなくても大体わかっていただけるのですが、海外ではこの1番があって初めて2番につながっていくという状況です。

実際にやっているのは、この日本酒輸出協会のセミナーとして初年度からやっているニューヨーク・ジャパン・ソサイエティでのセミナーです。日本酒の話を英語でさせていただいて、その後は試飲をしていく。もう延々とこれの繰り返しです。これがこういうすばらしい場所でやるか、レストランでやるか、公民館みたいなところでやるか、屋外でやるか、いろんな

ところでやり続けているということです。

実際、今はアメリカなんかも含めて和食というと寿司とか天ぷらとかすき焼きじゃないですね。全部ラーメンです。昨日も行かれた方もいると思いますけれども、盛岡にも一風堂がありますが、これは一風堂のニューヨーク店ですけれども見てみてください。アメリカ人が箸とレンゲを使ってラーメンを食べるんですよ。しかもズルズルすすって食べます。さらにここで飲まれているのが、うちの酒でなくて残念なんですが、これは新潟の「菊水」です。「菊水」さんのふなぐちを飲みながらラーメンを食べるんです。俺、蔵元ですけれども、一風堂は日本酒も置いてないし、ビールですよね。ラーメンを食うときに日本酒は飲まないかなあ、俺は。だけども、アメリカではラーメン食いながら日本酒を飲むのが当たり前です。実際、一風堂のニューヨークはこんなに日本酒を置いているんですよ。まだこれの下にずらっとあるのですが、こんなに日本酒を置いていて、見てのとおりラーメン頼んで、日本酒を頼みながら、飲みながら食べているというこういう状況が今のアメリカの普通です。アメリカだけじゃなくて海外。それだけ日本食、日本酒が当たり前の世界になってきた。

でも当たり前じゃなかった時代に、2013 年に、実を言うと国連で日本酒のイベントをさせていただきました。今、私が理事長をやっているのですが、日本吟醸酒協会という協会がありまして、ここが開催した世界で初の国連での吟醸酒の試飲会です。国連の中のレセプションルームがこの辺にあるのです。見学で一般人は入れないそのレセプションルームで、世界 193 カ国の大使とご家族、関係者を招待して試飲会をやりました。これは何でかというと、吟醸酒という言葉を世界に伝えていこうという思いから、世界中を皆で歩くのは大変だけど、国連に行ったらば 1 カ所に皆集まっているというところから話が始まっていった。これを主導してやれと言われたのですが、なかなか難しくて、その当時、国連に外務省の大使館があるのですが、国連の大使館になんと盛岡出身の、岩手出身の方が職員として来ていました。今日の来賓達増知事の1個上の先輩です。高橋さんという方ですけれども、その方が職員として来ていて、それで高橋さんに連絡したら「いや、できると思うよ」という話になって、それで私は緊張しながらやったんです。だから、岩手つながりでこんなことまでできるんです。国連をバックに「南部美人」のお酒のこの写真を全蔵元が撮って、これを PR に使っていいですよと。こういう講演会では使ってもいいですよという写真が撮れるようになる。こういうふうにして世界中の人たちが各蔵のブースに寄ってお酒を飲んでいただいたということになります。

さらに、アメリカやニューヨークでは当たり前だろと言われるので、ちょっと日本酒の遠いところ。ブラジルのサンパウロですね。世界にはたくさんの県人会があるんですが、ブラジルの岩手県人会って世界で一番大きな県人会なんですね。その 50 周年のパーティに行ってまいりました。いつも行っているんですけど、当時はまだ若い大石花巻市長もいますけれども、鏡開きをしました。飛行機で樽を持って行ったんですよ。税関で引っ掛かってエライ大変だったんですけど、中身入っていないので大丈夫だったんですが、「これでお前飲むのか」とか「日本人はみんなこんなでっかいので飲むのか」とか言われたんです。「違う、違う。これはパーティだ」と。「パーティ?」って言われるわけですよね。そういうのを全部説明してブラジルまで持って行った。でも、その当時、こんな鏡開きを地酒でやれる県人会はなくて、それで大変ありがたがられました。

それでブラジルはすごいところで飲まれていて、ブラジルと言えばサッカー。これはブラジルのサンパウロのサッカースタジアムがあるのですが、そのサッカースタジアムの中になんと和食レストランが入っている。その和食レストランは「コウジ」という和食レストランなのですが、ここでは、サッカーを見ながら当たり前に日本酒と寿司が楽しめる。こんなところまで当たり前に日本食が浸透している。日本食が浸透すると我々の売り先も増える、サッカースタジアムにまで、しかもブラジルですよ。日本じゃなく、サッカーの本場中の本場のブラジルにまでこんなものがあるということなんですね。

さらにドバイ。これはアラブ首長国連邦のドバイですね。ドバイというのは基本的にアラブの国ですから酒はだめなんですけれども、ドバイは観光地ということで特例がきいてお酒が飲めるんです。これはバージュハリバという世界一高いビルなのですが、1階に和食レストランがありまして、ここで「南部美人」を扱っていただいています。ここが扉なんですけれども、ここから出て中庭に行って撮った写真がこれです。ですから、このレストランに来ないと、基本的にこういう写真

は撮れない。逆側からしか撮れないんですけれど、こんなところにまで日本食と日本酒は行っているんです。

これは同じくドバイにある世界唯一の七つ星ホテル。五つ星プラスプラスというのですが、バージュアルアラブというホテルで、ここは全室がスイートです。敷地内には宿泊者とレストランの予約者しか入れないというホテル。ここで「南部美人」は実際にこういうバージュアルアラブジュメイラグループの商標を付けながらオリジナルラベルをつくって、そして瓶に貼ってこれを各部屋、スイートルームですから全部に冷蔵庫がちゃんとあってドンペリとか全部入っているのですが、この部屋と和食のレストランで提供しております。

こんなふうに日本酒というのは、こんなドバイみたいな国にまで行っている。さらに、今回、ちょっと岩手に来ていただいたのでおもしろい話としてあったのは、リトアニア。皆さん、社会の先生とかもいるでしょうから「おっ」とわかる人はわかると思いますけれども、リトアニアの首都ビリニュスに行ってまいりました。リトアニアって小さいんですね。これは大使公邸ですけれども、これ、杉原千畝さん。命のビザを発給した日本人、杉原千畝がその当時、本当にその建物の中で発給した机とタイプライターとビザです。当時のままの日本国旗。昔は縦なんですね。これがこのままここに置いてある。ここにはリストです。これがそのまま残っていて今は杉原千畝記念館になっています。ここに入ってこういうところに実際座れるんですね。なんで私がここにどうしても行きたかったかと言うと、「南部美人」はコーシャの認定を取っていますので、ユダヤとのつながりが非常に強い。そしてユダヤの勉強も相当していましたので、杉原千畝に関わることは大変興味を持っていて、その杉原千畝さんが実際に、本当にビザを発給したその机と椅子におじゃまさせていただきました。

それはそれで1つの理由だったのですが、実を言うと岩手県の久慈市とリトアニアのクライペータ市が姉妹都市なんですね。僕は二戸市で久慈市の隣だから久慈のものも持って行って PR を一緒にしますという建前で行ってまいりまして、この杉原千畝記念館で酒の会をやらせていただいたという、非常に強い思いのある場所でした。なかなかそういう歴史の現場に足を踏み入れて、その同じ場所に立つというのは経験ができないのであれなんですけど、皆さんももし海外旅行が解禁になって、特に世界史の先生方はぜひ行って見ていただければ非常に思いに残ると思います。

そしてさらにこういうところでも飲まれています。テルアビブ、イスラエルですね。「南部美人」の樽に日本国旗とユダヤの五芒星の国旗がこのように刺さっている。これは世界平和をまさに象徴している。今のロシアとウクライナの問題がある中でも、このような絵は本当にすばらしいなと思っていました。これは大使館にいた藤原さんという方が岩手出身です。釜石出身の方で、つながりがつながりを呼んで、呼んでもらうんですよ。藤原さんから「いやあ、南部美人をぜひやりたいんだけれど来てくれないか」ということで、おじゃまをさせていただいたときですね。

テレアビブまで行ったので、大使館の方に絶対観光ではいけない場所があるので、視察に行きますか、と言われておじゃましたのがこちらですね。エルサレムは行けるのですが、エルサレムとこの後出てくるパレスチナです。エルサレムはこういうふうに岩のドーム。これはムスリムの聖地。これはキリスト教の聖地。ビアドロローサというキリストが磔で歩いた道の最後に残るキリストが亡くなったと言われる教会です。そしてここはユダヤの聖地。嘆きの壁。ここに行って、嘆きの壁は入れます。これを付けないとだめですけれども、おじゃまさせていただきました。こういう宗教施設が半径 200 メートルぐらいのところに3つ全部そろっている。なのにここはちゃんと機能しているということで、非常に歴史とか世界史というところで考えるとおもしろいところだなと思って行ってまいりました。

さらにパレスチナにも行ってきました。これは外務省と一緒でなければ入れません。なんで行ったかというと、これはパレスチナに入ったときに、イスラエルから、壁があって。それを通り抜けて、この看板がどんどん出てくる。これは何かと言うと、アラブ人以外は殺されても文句は言いえません、という看板なんですね。しかも、なんでそんなアラブの酒が飲めないところに行ったのかと言うと、パレスチナには実は宗教特区、キリスト教特区というところがあって、そこではなんとビールの会社とワインの会社が1個ずつあるんです。同じタイベワインとタイベビールなんですけれども、そのタイベワインのレストランで、オーナーが日本酒を置きたいということでおじゃまさせていただいて、「南部美人」を今現在置いてもらっています。おそらくパレスチナで飲める日本酒はうちの酒しかない。こういうふうなこともできる。でも、イスラエルは、女

の子にまで兵役がありますから。本当に厳しい国で、そういった意味では日本ってそういうのがないだけすごいなと、平和ってすばらしいなと思いました。

最後はアフリカ。これはNHK-BSでこの間も放送されたんですけれども、ウガンダという国に行ってまいりました。国民の平均年齢が21歳とか22歳ぐらいのものすごい若い国なんですけれども、そこに京都大学卒業の若い子たちがベンチャーで「やま仙」という和食レストランをつくりました。この大きい和食レストラン。今「南部美人」を輸出していますので、ここで日本酒のイベントをやりましょうということで行っておじゃまをしてきたときの様子です。これは大使館へ行ったときの様子です。こういうふうなアフリカの方々が皆喜んで日本酒を飲んでくれる。もう時代はこういう時代になってきたんですよ。アフリカだから飲めませんじゃなくて、岩手のお酒、東北のお酒は海を越えてアメリカとかヨーロッパだけじゃなく、アフリカのウガンダまで行っちゃってる。そういう時代にもうなってきているということなんですね。

輸出の挑戦をまとめますと、地方の小さな会社でもオンリーワンの商品ならば、僕は世界を相手に商売をすることは可能だと思っています。その世界では、日本の伝統産業こそが僕はオンリーワンだと思っています。マンガもそう、ゲームもそう、アニメもそう、着物もそう。そういったものこそが僕は挑戦の糧になるんじゃないかなと思っています。

あと1つ大事なのは会社の規模の大小ではなく、価値の大小を世界は見ています。だから、会社が大きいからどうのこうのじゃない。僕が海外に挑戦しようと思ったときに、「お前みたいなちっちゃな会社が何言ってんだ、あほ」と言われたんですけど、そうであったら「月桂冠」と「白鶴」で終わりじゃないかと。そうじゃなくて、世界はそんな規模の大小で酒なんか待っていないんですよ。価値が高いものだったらば、規模が小さくても受け入れてくれている。実際にうちの蔵がそれで成功している。ほかの蔵でも成功しているところが東北に多々ある。それを考えると、規模の大小じゃないよ、価値の大小だよ。学校でもこれは何かのヒントになるんじゃないかな。規模じゃない、価値なんです。その価値がどれだけ高いかどうかで人は物を選ぶんだと。それこそが世界基準だなと思ってまいりました。

あとは後世に商売を継続していくのならば、世界を相手にしなければ、僕は生き残っていけないと思っていますので、さらにこれからも世界挑戦続けて行きたいと思っております。

挑戦その3。次は、食から考える新しい地域づくりということでお話したいと思います。

実は二戸市って、日本で初めて、実は世界でも初めてなんですが、フードダイバーシティ宣言を2019年にしております。これは何かというと、直訳すると食の多様性です。多様性という言葉は、今、いろいろな場所で言われていることなんですけれども、実はこの日本という国は、食の多様性において最も遅れている国の1つです。全く食に多様性がないんです。なぜこんなことをやっているかというと、経緯は「南部美人」がビーガンを2019年に取得させていただきまして、二戸のもう1つの大きな企業である南部せんべいの小松製菓さんもビーガンを取ったんです。それで、ビーガンを取った会社が2つもあるから、じゃあビーガンの町を宣言しませんかと、二戸市に話をしたら、二戸市はそれをだめだと言ったんですよね。なぜならば二戸市は鶏肉産業を含めた肉産業が非常に盛んだから。ビーガンの町なんて言ったら肉を否定してしまうからだめだよ、ということで、じゃあどうするかと考えたときに、例えばハラールの町とかコーシャの町とかビーガンの町なんて言うと、それ以外の人を排除するような感じになってしまう。それは逆に世界基準に対して反対方向だと。逆に、ビーガンとかハラールとかコーシャとか、全部いろんなものを町として受け入れをしますよ。多様性のある食の方々を二戸市はみんな受け入れる準備ができていますよと。うちがコーシャも取っていますので。そういった意味で、フードダ

イバーシティ宣言をさせていただきました。まだコロナの前だったので、インバウンドで来るお客さんたちを見越しての宣言です。

なぜかと言うと、世界人口 80 億でビーガンの人口は6億から7億いるんです。11 人に1人はビーガンなんです。ハラールやコーシャや、さっき言った NON-GMO や、アニマルフリーや、そういった宗教、信念、様々な意味での食に禁忌、自分の食に禁忌を持つ人というのは、世界人口の約 40 パーセントもいるんです。男か女かでいったらどっちかの人口と同じぐらいです。それだけの人が食に禁忌があるんです。これは好き嫌いとかじゃないですよ。信念や宗教上、何か食べることができない人というのが4割もいる。

日本で考えてみてください。皆さんの学校で、皆さんの地域で、食の禁忌者って何人いますか。ほぼ見えませんよね。そういった意味で、この国日本では食の禁忌者と言われるのは1パーセントいるかいないかだと言われているんです。それは日本が日本という、日本国民という、日本人というある種統一性が高い国だから。なかなか食の禁忌というのに対して今まで発想が遅れていた。ハラールなど宗教のものとかで考えるのはいっぱいあるんですけど、それは宗教が食につながっている、それ以外にも信念、心情で食につながっているというところに対して、日本はアプローチが全然ないんですね。それをなんとかしていきたいという思いを描いてフードダイバーシティをやらさせていただきました。ニューヨークやロンドンやシンガポールとかに行くと、当たり前にレストランに行ったらメニューにビーガンがあったり、ハラールがあったりしています。昨日行かれた盛岡のレストランで、そういうメニューがありましたか?ないですよね。基本的にないんですよ。盛岡でないのは当たり前だけれど、東京に行ったって探すのは結構難しい。そういう状況で、二戸はそれを逆手に取って、逆にほかが受け入れられないような食の禁忌者を、二戸に来たらみんな受け入れできますよ、ということでやらさせていただいているのがこのフードダイバーシティです。

一番の肝となっているのがここです。国連の SDGs。いっぱい今言っていますけれども、その大目標である誰も取り残さない。この大目標、一番の目標、これがフードダイバーシティの一番の目標です。食に禁忌がある人も、ノーマルな人も全てを受け入れる準備を二戸はするという宣言をしたのがフードダイバーシティ宣言ですね。実際にこう見てみると、おいしいとか新鮮とか名物と言うんだけれども、そんな価値の表現は通常食の人にしかしゃべっていないんですよね。日本の価値の表現ってそれしかないんです。そうじゃないところにもっともっと伝えることがあるでしょ。ここがこの食の禁忌者の一例ですね。宗教でだめな人、主義、信念でだめな人、というふうに分かれているんですが、こういった人たちをみんな受け入れができるような町にしていきましょう。盛岡だったらなかなか難しいけれど、二戸はそれを目指していきたいということでやったのがこの宣言です。

どういうことかと言うと、二戸フードダイバーシティ宣言の中身がここに書いてあります。ここで最も大事にしているのがここですね。SDGs の食の分野から誰も置き去りにしないをやっていくんだよということでやっています。

あともう1つは、世界中どこでも通じる世界標準のものづくり、まちづくりを目指していくということになります。その食の分野からやっていこうということになっています。これが宣言したときのやつですね。これはもう実際ビーガン取っている「南部美人」と「南部せんべい」。さらにこれはビーガンのお寿司です。これは東京でつくってもらったんですが、今、二戸に来てもこのビーガンのお寿司を当たり前に食べられます。そんな時代になってきたということになります。

実際に二戸では何をやっているかと言うと、このハッピー・カウという世界のビーガンの人たちの食べログです。グルナビだったり食べログだったりするアプリなんですけれど、これを入れると…、これは今もうちょっと増えていますけれども、こういうふうに出てくるんですね。この青の完全ビーガンマークは「南部美人」のバーです。こういうふうにしてどんどん、どんどん出てきて、こういうふうにメニューが出てきます。これを選んで来ると、盛岡は残念ながら7店しかないんですが、二戸は追い越します。8～9店になっていきますから追い越していきますよ、二戸に来ると実際にこれ全部ビーガンメニューです。見てください、このお蕎麦も全部ビーガン。これは小松製菓がやっているせんべい屋さんなので、せんべいの天ぷらですね。このつゆもカツオなんか一切使っていない、煮干しも使っていない出汁でやっている。これはビーガンであり

ハラールでもある両方、ダブルです。こっちは全部ビーガン。鉄板焼きのライさんがやるこれなんか南部せんべいの、ビーガンせんべいを使ったビーガンのピザせんべい。これは寿司屋であるタケダさんのビーガンのお寿司。見てください、こんな黄色とか。これはマグロじゃないですよ、パプリカ。パプリカを使ってこんなお寿司ができるよと。一切動物性のものを使っていないのがこのお寿司。だから、砂糖も上白糖を使いませんので、それを使っているガリはないんですね、ここには。ガリは使わないということで、こういうふうになっています。スイーツも全部上白糖を使わない。てんさい糖だったりデーツ糖を使ったマックロビのスイーツなので、こういったものを出す店もあるし、ここはバーです。バーでビーガンってなかなかないんですけれども、うちはジンもウォッカも造っているので、これが両方ビーガンなんですよ。これでつくった砂糖とかそういったものを一切入れないフルーツを使ったカクテルが認定されていて、バーでもやっているよ、ということなんです。こういったことを今はメインとしてまちづくりでやっています。

そしてもう1つ。これは今年取り組むことなんですが、こっちのほうが皆さんには馴染みがあるかもしれませんが、ワンテーブルデイというのをつくっていきます。それは何か。これはもうすでに姫路市が先行でスタートしているんですけれども、同じ釜の飯を食う。これって、今の小さい子どもたちってできない子がいっぱいいるんですね。コロナはちょっと関係なくね。これは何かと言うと、アレルギーを持っている人たちは、アレルギーのない人と一緒になって食卓を囲むことが難しいんです。アレルギーのある人のご飯に、アレルギーの、例えば牛乳がピチョッと飛んで入っちゃったら、大変なアレルギー発作を起こすということで離して食べなければいけない。そんな状態で同じ釜の飯を食う。今、二戸は実は小学校給食の月に3回ぐらいは同じものをアレルギー食とそうじゃない人が食べることをやれているらしいんですけれども、なかなか大変だと。それをちゃんとやっていきましょう、ということで考えているのがこれです。ビーガン食というのが、ビーガンの食事が動物性のアレルギーに対応しやすいところに注目して、給食をつくる管理栄養士とフードダイバーシティ株式会社とビーガン料理世界一のサイドのシェフが一緒に監修し、メニューをつくって園児に食べさせていく。ただこの取り組みはビーガン食の導入や、ビーガンの活動を推進しているものでは全くありません。それを利用してやったらいろんなことができるよね、ということで、見てみるとこういうふうにして、卵も牛乳も、この辺も甲殻類も、これはビーガンになれば全部カットできるんですよ。7割カットできる。あとはこういうところをカバーしていけばいいというだけなんですね。それで、これまでは通常食の人と除去食、除去食すら食べられない人は弁当を持って来なければいけない。ここに壁があるんです。こころの壁とリアルな壁がある。これを全員1つのテーブルで皆同じものを、しかもおいしく食べようと。この除去食の、例えばあまり大しておいしくないと思われるサラダと、なんかわからないけどスープだけをこっちに食べさせるというわけにいかないので、こっちの人もおいしく食べられるものをビーガンの技術を使ってつくりましょう、といって姫路でやっているのがこれです。この彼女はものすごい重いアレルギーのある子で、今までこうやって一緒にご飯を食べたことは1回もなかった子だそうです。それがこのワンテーブルデイのビーガン食、しかも卵のアレルギーもあるからプリンなんか食べたことがない。プリンも食べられるんですね。こういったものを一緒になって食べているんです。これを、今、二戸でも実現させようと思っていて、毎食は無理ですけれども、期間をつくってやっていけないかな、と思ってやっています。これがサラダとスープだけだったら結構簡単にできちゃうかもしれないけれども、それじゃあ、この人たちが本当に食べたいものじゃないでしょと。食べたいものを食べさせてあげたいから、それに近いものを、そぼろご飯だったり、これはコロッケです。これは卵ですよ、一切卵を使っていない卵。卵を食べたのは初めてです。初体験。卵自体食べたことがないから。でも卵じゃないんですよ、これ。全く卵じゃない。卵の味のする卵。実際には、これには写っていませんけれど、ここに親がいっぱいいるんですけれど、アレルギー食を持った親たちはもう感激して全員泣いていたそうです。家では絶対できないこと。我慢させて、我慢させて、本当に我慢させてばっかりの食をこういうふうに楽しく皆と一緒に食べられる。こんな夢のあることないじゃないですか。これを二戸はやります。小学校も含めてですけれども、園児たちにこれをやっていこうと思っています。これもフードダイバーシティの取り組みです。だから我々のやっていることは、実は皆さんのお仕事にちょっと近いところにも関わってくるのかなと思っていました。

フードダイバーシティのことは今お話したとおりですので、これからもさらに力を入れて二戸はやっていきます。でも一番大事なのは、26,000 人の二戸だけでやっても意味がないんですよ。やっぱり岩手県全体でやらなきゃ意味がない。だから岩手県全体で、僕はこれを広げていきたいと思っていますので、ぜひ今日岩手から来ている各地の皆さん、力を貸してください。やれますから。絶対にできるんで、様々フードダイバーシティにして、世界中から来るお客さんたちに岩手の良さを、そしてアレルギーのある子どもたちに、皆で一緒にご飯を食べる喜びを、この2つを与えていくのがフードダイバーシティですので、お力を貸していただければと思っています。

最後、4番目の挑戦です。これはコロナからの危機をチャンスに、ということで、今現在取り組んでいる挑戦についてお話をさせていただきたいと思います。

コロナは大変でしたよね。皆さんの学校は最も大変だった中の1つじゃないかなと思っておりますけれども、私は実は2020 年の3月2日にニューヨークから帰国しまして、そのときのニューヨークは全く何ともなく普通だったんですが、帰ってきてから3日後にニューヨークはシャットダウン。ニューヨークから連絡が来て、「久慈さん、コロナになっていない?」って。「いや、大丈夫だよ。今はとりあえず隔離しているから」と言って2週間隔離をさせていただきまして、なんともありませんでした。でも2週間も自宅の前に車が停まっていると二戸はすぐにバレて、言われるんですね。「コロナだよね。南部美人さん」、「社長、コロナだよね」と会社に電話がかかってくるんです。「いや、違います。コロナじゃなく、社長は今ちょっと安全のために隔離…」「ほらコロナだ」とか言われるわけです。参りますよね、田舎って本当に困るんですけど。あとでそれは違うと広めてくれ、とやったんですけど、僕はコロナじゃない、大丈夫だったんですね。

コロナのまん延で緊急事態宣言が第1回目発令されて、飲食店が全て閉店してしまいました。売り上げ半減。さらに海外のロックダウンによって、うちの海外売り上げゼロです。日本の国内半減。もうそれ以降は酒はご存じのとおり。いつまでも悪者にされ続けました、2年半。今でも悪者にされている。そういう状況が続いてきて、実を言うと、学校の業界も大変だったかもしれませんが、お酒の業界、飲食の業界、本当に大変でした。

そんな中でコロナの初期に、街からマスクや消毒アルコールが消えたんですね。皆さんご存じのとおり。地元の医療関係者から消毒アルコールがないという悲鳴が上がってくるんですよ。「南部美人」でつくれないのか、という問い合わせがくるんですけれど、できないんですよ、うちは日本酒だから。そんな高濃度のアルコールなんか造ることができないって「こめんなさい」と謝っていたんですよ。

でも、日本酒の製造免許と消毒アルコールとして使える高濃度アルコールにあるスピリッツの免許は違うということで、僕はスピリッツの免許を申請しようと思って動いていたんです。そこに1本の電話が鳴って、北上のほくりょうという会社の笠井社長からだったんですけれども、その電話の内容が「医療関係も厳しいんだけれども、もっと苦しんでいるところがあるんだけど知ってる?」と。それが医療的ケア児の皆さんなんだと。「医療的ケア児?なんですか?それ」って、俺は恥ずかしながら知らなくて、小さい頃から酸素吸入やったり胃ろうをやったりしている子だと。「えっ、岩手に多いんですか?」と言ったら。200 人ぐらい岩手にいる。全国だと2万人近くいると。そういう医療的ケア児の人たちは、生きるために消毒が必要なんです。胃ろうの取り換えをするのも、ここを切開しているから呼吸をやるのも、全部生きるために本人やケアする家族は消毒アルコールが必須なんですね。その医療的ケア児の家から消毒アルコールが全くなくなった。じゃあ買いに行けばいい、薬王堂に並んだらいいだろう、という人もいるんだけど、ご存じのとおり、両親で片方が全部ケアしなければいけない状態でそんなに並べるわけないんですね。そういう状況で、じゃあどうするんだと。そして消毒アルコールなんとかできないか、とまた言われる。困ったなあと思っていたときに、日本酒の免許ではどうすることもできないんですね。さらに消毒アルコールというのは厚生労働省の管轄なので、国税庁が我々酒の業界の管轄なので、例えば勝手につくって消毒アルコールなんていうことは絶対に言えないんですよ。そんなの酒税法違反で捕まってしまいます。

困っていたときに、なんと厚生労働省から信じられない通達が出るんです。2020 年3月。酒の会社が製造した高濃度アルコールを消毒用に認めるという通達が出たんです。これはとても信じられないんですよ。皆さんは文部科学省が監

督官庁でしょうから、その文部科学省の目が光っている中、国税庁の管轄の酒屋が学校やっていいですよ、というぐらいの衝撃です。そのぐらいの縦割りを越えてきた衝撃的な通達でした。それに呼応して、なんと国税庁が日本酒の免許で、ほかに免許を取らずに、スピリッツとかそういうのを取らずに、高濃度アルコールを造って消毒用アルコールとしての販売を許可するという通達が出るんですよ、すぐさま。これは絶対後ろで一緒に話していたなと思うんですけれど、だから我々は日本酒の免許で消毒アルコールをやれることになった。これはどういうことがと言うと、吟醸酒とか本醸造に添加する醸造アルコールというのが高濃度アルコールなんですね。これは 95 パーセントの濃度で蔵に来て、それを 30 パーセントに薄めるんです。そして添加に使うんですけれど、その 95 パーセントのアルコールを 30 パーセントに薄めず、60 パーセントとか 70 パーセントまで薄めてそれを消毒アルコールとして売って良いという許可だったんですね。これはとてつもない通達でした。普通はそんなことをしたら酒税法違反で捕まって免許はく奪です。そんなことを今やってもいいということになった。すぐに「南部美人」では消毒アルコールの製造販売のスタートを4月にさせました。実際に地元医師会に最速で配り、それと同時に一番困っている医療的ケア児の家族の下へ私自身が消毒アルコールを持って行きました。その当時の様子を NHK では放送してくれたんです。その消毒アルコールを持って行った家族から来た写真とお手紙。皆、あなたの「南部美人」の消毒アルコールで助かったと。これは飲みそうだからちゃんと気をつけろよ、と言ったんですけど、こういうふうにして感謝をされた。本当にすごかった。

僕にとっては、人生で初めての「ありがとう」という言葉をいただきました。私、生きてきてこれまで 50 年。「南部美人のお酒はおいしいですね。本当においしいお酒をつくってくれてありがとうございます」という「ありがとう」は、たぶんお世辞も入れれば何万回も聞いているんです。本当にそういう「ありがとう」はずっと聞いてきて、それに対しても僕はとても感謝で、本当にすばらしいと思っていた。本当に僕自身が「ありがとうです」と思っていた。でも、この医療的ケア児の家族、お母さんたち、そして本人たちはしゃべることができない人が多いんですけれども、こういう人たちから届いた「ありがとう」は「命を救ってくれてありがとう」。僕が生きてきてそんな「ありがとう」は初めてもらいました。本当に悩んだんですよ、この消毒アルコールをやるときに。私の会社は、さっきも言ったとおり品質一筋を掲げて、飲むためのおいしいアルコールをつくる会社なのに、飲まないアルコールをつくっていいのか、俺の代で、と非常に悩みました。仏壇の前でだいぶ悩みました。本当に悩んだ。やっても大丈夫なのか、ずっと悩んだ。でも目の前で泣いている、苦しんでいる、もがいている、辛いと言っている人があまりにもあのとき多かった。本当に多かった。しかもこの医療的ケア児の皆さんたちは、もう方法がなかった。どうすることもできなかった。そのぐらい苦しんでいる人が目の前にいて、僕は僕のプライドをかざしてその人たちを見過ごして通り過ぎることはできなかったんですね。マスクや医療用のガウンは民間でつくれるかもしれない。家庭でもつくれるかもしれない。でも消毒アルコールは免許を持った我々にしかできない。免許がなければ、ユニクロの社長だろうとドコモの社長だろうと盛岡一高の校長だろうと、誰も造ることができない。絶対に造ることができない。免許を持つ岩手の 21 の蔵。そこでしか造ることができない。だったらやらない選択肢はない。絶対やろう、そういう決断をして、この消毒アルコールをやりました。

でも、最初はリリーフのつもりだったんです。どうせ秋になれば消毒アルコールがたぶん出てくるから、今ないところをつなごうと思ってやっていました、最初は。でも医療的ケア児の皆さんの家庭に届けていくうちにこう言われたんですね。僕は「差し上げます」と言って持って行ったんです。寄付します、と言って持って行ったら、頑としてただではもらわないと。必ずお金を払わせてほしいと。「いや、寄付でいいです」と言っても「絶対お金を払います」と言うんです。どうしてそこまで頑ななのかと思ったら、私たちの思いは施してもらうことを喜んでいるわけじゃないと。これからどんなパンデミックが起きても、どんなに日本の状況が危機的状況に落ちても、私たち医療的ケア児の家族と医療的ケア児のこの子どもたちが安心して暮らせる町にしてほしいんだと。消毒アルコールがなくて絶望に暮れて泣いて過す夜はもういやだと。そんな命の絆である、命の糧である消毒アルコールを造り続けてほしいと、お願いをされました。

全くもってそのとおりと思って、リリーフでやるつもりでやっていたものを、会社に帰って話をして、俺が生きている間は

一生消毒アルコールを造りますと「決定しました」と報告をさせていただきまして、会社では大変なことになりまして、どうすんだ、になってしまったんですけれども、私としてみれば、僕がアルコールを造り続ければ、岩手にいる200人の医療的ケア児は、これから一生消毒アルコールで困ることないです。「南部美人」が潰れない限り。だから僕は一生造ると決めた。当然採算は絶対に取れません。しかも特例処置が効いているから日本酒の免許でできる。特例が切れたらスピリッツの免許で蒸留施設を入れて造らなきゃいけない。そうしたらどんなにお金が掛かるのか。試算したらどんなに小さくても1億掛かる。コロナで売り上げが半減しているんです、うちの会社。そこに1億の投資をして新たな設備を入れる。社員も反対。当然お隣の岩手銀行は大反対。お金を貸してくれません。

さあ困ったぞとなったのですが、僕もその時はそれしか見えていない。消毒アルコールしか見えていなかったからだめだったんですが、スピリッツの免許でできる消毒アルコール。うちは酒蔵だ。スピリッツで調べていくと、いろんなお酒が造れるんですね。ラムも造れるし、ジンもウォッカもいろんなものが造れる。だったら酒を造って、そのお酒を売っていったらいいじゃないか。そのお酒を造って売っていったその脇で消毒アルコールを造り続けていけばいいじゃないか。酒蔵なんだから日本酒以外の酒でも造ればいい。その中でクラフトジンは非常に全国的にも人気があって、海外からも僕は言われていた。でも「酒蔵だからねえ。ジンなんか造らねえよ」なんて言っていたんですけれども、クラフトジンを造れば、その脇で消毒アルコールを一生造り続けられる。ということで、クラフトジンを造ることに決めました。だから、コロナがなければ今言っているクラフトジンとかクラフトウォッカは造らなかった。造るつもりも全くなかった。コロナがあったから初めて造ったんですね。

ジンを造るとなったときに、ここでまた問題が出て来るんです。酒米がものすごく余っているんですね。これはもう契約栽培しているから、「いりません」とか言えない。そのとんでもなく余っている酒米をどうするんだと。「食べてください」というお願いをしている蔵もあって、我々としても「食べてください」と言おうと思ったんですが、それをやっちゃうと食米のほうのジャンルを奪ってしまいますから、結果的に誰も喜ばないよね。でもこの酒米を原料にしてジンとかウォッカを造ったら、誰も損しないよね。この余った酒米を使うことは大丈夫なので、使ってクラフトジンとクラフトウォッカを造ることに決めました。通常時ならそんなあほなことはやりません。あまりにもコストが高くなり過ぎるので。でも我々としてみれば、余ってしまって捨てるぐらいなら、一生懸命農家が造って、契約栽培した農家が一緒になって我々と造った米を捨てるぐらいだったら酒にしてしまおうということで、酒米を使ったクラフトジンとクラフトウォッカを立ち上げました。「南部美人」のクラフトジンは、岩手の余ってしまった酒米を原料に、二戸市のユネスコの世界無形遺産登録された漆をボタニカル、香りの成分に使って、岩手でなければ製造することができない、岩手に拘ったクラフトジンを造っております。

同時並行で、ジンを造ることは決めていたんですけど、ジン以外は頭になかったんですね。ウォッカもスピリッツの免許で造れるということがわかって、ウォッカと思って調べてみたら、ウォッカの世界のルールってただ1つ。穀物を使って造った高濃度アルコールを、白樺の活性炭でろ過したもの。ただこれだけなんですよ。これでいいの?白樺の活性炭?あれ?ちょっと待てよ。岩手県って炭の生産量日本一だっけなと思って、それで青年会議所でもお世話になった後輩である久慈の谷地林業の谷地君に電話して、「谷地君、谷地林業で白樺の炭を造っているの?」と聞いたら「造っている」って言うんですね。あ、つながった、と思って、「その炭を俺に売ってくれ」と言ったら「今すぐ持って行く」と言ってすぐに来てくれて、それでその白樺の、岩手の平庭高原の白樺の木でできた炭を使ってうちのウォッカは造っている。これも岩手でしか造れないウォッカになりました。

実際これがクラフトジンとクラフトウォッカ。うちの商品です。こういうふうにして販売をさせていただいているというのが現状となっております。ちょっとたくさんいろんなところで売っていませんので、帰りに買って帰りたいと思う方いると思いますが、盛岡駅のフェザンの下の利き酒屋にはあるかなあ。あと川徳デパートにはあると思うんですけど、今から川徳に行くのは皆さん面倒でしょうから、ないときはうちのネットショップで買えますので、もしどうしても飲みたい方はネットショップに来て買っていただければ。最悪、フェザンの地下1階にある利き酒屋に注文しておけば、後で届けてくれますから、ぜ

ひそこに行っていただければと思います。

さらに、我々としてみると、まとめていきますと、結果的にコロナの中、新事業のジンとウォッカをさせていただき、コロナに負けない企業のチャレンジとしてたくさんマスコミに取り上げていただきました。実際に、我々は日本酒と一部ちょっとリキュールしか造っていませんでした。もう1つのことしかしていないというのは、こういう世界的な危機の状態に落ちると本当に何もできなくなるということがコロナでわかりました。ジンやウォッカやそういったものをやっていくことによって、様々リスク分散をするということにもつながっていくということで、私としてみれば非常にありがたいかな、と思っています。

ただ、我々としてみれば、実は酒蔵なんだから日本酒造って当たり前の世界なので、ジンやウォッカを造ろうと思っていたわけではなくて、その全ての起点が消毒アルコールと医療的ケア児との出会いから始まっています。一生、消毒アルコールを造り続けるというその決断から、だったらば酒も一緒に造ったほうが良いということになりました。そうじゃなければそれで終わっていたという段階の話です。

さっきもしゃべりましたけれども、マスクや医療用のガウンなどは普通の会社や家庭でも造れるけれども、消毒アルコールは製造免許を持っている会社にしか造れないんです。我々にしかできないことを我々がやらないでどうするということで、我々の横の蔵元のネットワークでやって、実際、消毒アルコールの足りなかったときに、日本中の 360 ぐらいの酒蔵がみんな消毒アルコールを造りました。岩手でも「あさ開」さんも造ったな。一関でも造ったな。造ったところが結構ありまして、本当に酒蔵が地域や社会貢献にアルコールをもって本当に胸を張ってできたんじゃないかなと思うのがこの消毒アルコールです。

実際にブランドとしてもトップ銘柄である福井県の「黒龍」というお酒があります。これは今の天皇陛下が好んで飲まれるお酒なんですけれども、この「黒龍」という蔵でも、まさかやるとは思っていなかった。「黒龍」ですら消毒アルコールやりました。何千本造って永平寺に全部寄付です。そうして地域を助けていくということを、消毒アルコールの地産地消がまさになったんですね。だから我々としてみると、これをあのときだけに終わらせるんじゃなく、その先にまで続けていきたいと思っています。

罪悪感がさっきあったという話です。困っている人を通り過ぎることは私にはできなかったですよね。結果的に 300 以上造った。「南部美人」としても会社としてコロナの逆境の中、新たな事業をスタートさせることで逆境を跳ね返す力になりました。あれがなければ、うちのちょっと本当に厳しかったので、どうしたもんか、と思っていましたけれども、絶対に乗り越えようと、「ピンチをチャンスに」という言葉を合言葉に、まあ、うちは東日本大震災のときも「ピンチをチャンスに」を合言葉にやっているんですけれど、普通のときは当たり前にできるんですよ。学校の授業もそうでしょ。普通のときは普通にできるけど、大変なときにやっぱりやることこそが、その学校やその会社の力を見せるときなのかな、というふうに思っていましたので、私にとってみると、それを今回コロナで実現させた。それにうちの社員は全力で付いてきた。本当にありがたいと思っていました。

今日の最後にお話をさせていただきたいと思います。

まず、本当のもう一度、岩手にお出でいただきましてありがとうございます。

私たちにとってみると、本当にこういった人数の方々が、コロナの後に岩手に来てたくさん経済活動をしていただいたことに、心から感謝しております。

そして、学校教育。我々のお酒は学校教育にあまり関係ないというところはあるんですけれども、学校教育というのは、本当にその地域をこれからさらに育てていく、最も大事な根幹たる部分じゃないかなと思っています。

私の親父。今の現会長はですね、岩手県の県の教育委員を長らくずっとやっていました。だから、本当に学校の先生たちとの交流も多々ありましたし、様々いろんな話を私は聞いておりました。学校の先生たちがどれだけ大変な思いをしてやっているか。そこに対して国がどうしてもっと支援をしないのか。様々なことも聞いて参りました。

私はそういうことはやっていませんけれども、聞いてきた人間としてみると、本当に学校の先生方、そして私自身も福

岡小学校のPTA会長をやらせていただいた。県の副会長もやらせていただいた関係から、PTAの活動に対しても非常に敬意を持っております。

そういった意味でも地域を良くしていく、子どもを育てていく、そして立派な大人にしていく、地域愛ある大人に育てていく、その地域愛の最も足るものは地酒でございます。その地の地酒を、飲ませたら大変なことになりますから、飲ませるんじゃなく、地域の地酒をぜひ、こういうすばらしいお酒が文化としてあるんだよということも教育に取り入れていただければと思っています。

今、岩手県二戸市は、二十歳になった子どもたち全員に「南部美人」のお酒をプレゼントしております。しかもそのお酒は全部、二十歳の成人式実行委員会の子どもたちがラベルをつくって、その1年だけのオリジナルラベルをつくり、それを貼って全員に差し上げています。ただ、成人式で渡すとまだ二十歳未満がいるので、4月1日以降になってから市役所に取りに来い、ということにしているんですけれども、皆喜んでいます。びっくりするぐらい教育委員会の人たちが喜んじゃって、本当にいいことをしたなと思っています。これからもずっと僕は、これもずっと死ぬまで続けて行こうと思っていますが、うちの息子は今年二十歳でございまして、まさに成人式なんですね。「お前、いるか」と言ったら「いるに決まっているでしょ」と言われました。「お前はいつも飲めるからいいだろ」と言ったんですけど、「いや、絶対にもらう」と。そして「お父さんには飲ませない」と。出す前に俺は試飲でチェックするんだけど、まあまあ、そういうふうにして喜んで、酒蔵の息子ですら喜んでいるんだから、たぶん普通にもらったら嬉しいんだろうなと思っていました。

そんな地域貢献を酒蔵はできる会社です。皆さんの地域、皆さんの県に酒蔵がたくさんありますので、その酒蔵をぜひ愛して、利用してやってください。僕みたいに話せる人は少ないかもしれないけれども、呼べば酒蔵の社長は喜んで飛んで行きますので、ぜひ、特に夜になったら喜んで酒を担いで行きますから、皆。大喜びで行きますから、ぜひ呼んでやってください。そして地域を一緒に盛り上げて行きましょう。

今日は本当にありがとうございました。

閉会行事

(1) 次期開催県挨拶

1 福島県高等学校ＰＴＡ連合会会長　原 正幸

岩手県高Ｐ連の皆様、３年ぶりとなる素晴らしい東北大会、本当にありがとうございました。この大会に負けないよう来年度福島県高Ｐ連一同頑張っていきたいと思います。昨年・今年の震災で、予定していた会場が使えない状態になっていて、飯坂温泉で開催する予定です。是非ここにご参集の皆様、来年度も福島にいらしてください。よろしくお願いします。

2 第 72 回東北地区高Ｐ連福島大会準備委員　鈴木 健児

福島は一昨年ＮＨＫの朝ドラ「エール」の舞台になったことで、皆さんご記憶に新しいと思います。

今日は、スペシャルゲスト福島市ＰＲキャラクター「ももりん」を連れてきました。福島を代表する果物桃とリンゴで「ももりん」です。１歳です。来年の今頃、桃が出始める時期ですので、美味しい果物とお酒でお待ちしております。皆さんよろしくお願いします。

3 第 72 回東北地区高Ｐ連福島大会実行委員長　鈴木 進一

福島は音楽と果物ばかりでなく日本酒も美味しいです。全国新酒鑑評会では９年連続金賞受賞数日本一を達成しています。まだコロナ禍ではありますが、来年はレセプションもオープン参加で計画していますので、日本酒、円盤餃子、イカニンジンを堪能しにいらしてください。来年の大会が皆さんにとって良い研修･交流になるよう私たちも頑張りますので、よろしくお願いします。

(2) 閉会宣言

第 71 回東北地区高Ｐ連盛岡大会実行委員長　志田 順悦

皆様今日は岩手にお越しくださいまして本当にありがとうございました。

皆様の前に大小の丸いものが浮かんでいるのが見えるでしょう。大切なそれは、今日ここで結ばれたＰＴＡの素晴らしいご縁です。子ども達の応援団の証です。どうぞ、これをポケットやトランクに入れて、今日はお家まで無事にお帰りください。そして、来年はそれを大切に福島にお持ちください。

この大会を支えてくださったすべての皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。これをもちまして、第 71 回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会盛岡大会を閉会いたします。

第 72 回東北地区高等学校 PTA 連合会　盛岡大会　参加者数一覧

		一般参加者	受賞者	合計
1	青　　森	79	2	81
2	岩　　手	371	4	375
3	宮　　城	150	6	156
4	福　　島	52	2	54
5	山　　形	56	2	58
6	秋　　田	39	3	42
7	全国高Ｐ連			1
8	来　　賓			8
9	運　　営			90
10	アトラクション			91
		747	19	956

ＰＴＡ活動 在り方探る

盛岡で東北地区高校連合会大会

持続可能なＰＴＡ活動の在り方について意見を交わす各県の代表者

第71回東北地区高校ＰＴＡ連合会盛岡大会（大会長・大柏良県高Ｐ連会長）は1日、盛岡市盛岡駅西通の市民文化ホールで開かれた。新型コロナウイルス禍でＰＴＡ活動が制限される中、持続可能な在り方について情報共有した。

東北6県から約千人が参加し、各県代表がパネル討論した。

いずれの県も、コロナの影響で過去2年の活動が制限されたと報告した。対面で集まれずＰＴＡ役員や教師の顔と名前が一致しない、学校行事に保護者が参加できないなどの課題が指摘された。

コロナ禍の課題、実例共有

一方、オンライン会議システムを導入したところ対面よりも参加人数が増加した実例も挙げられた。秋田県高Ｐ連の湊屋啓二前会長は「悪天候時に遠隔地から集まる必要がなく、時間短縮にもなる」とコロナ後を見据えた。新役員紹介動画を配信したことも報告した。

大柏会長は、「3密」を避けて行われた学校周辺の草刈り活動を紹介。「ＰＴＡの連携がとれたし、どんな人がいるか分かった。新しい方法ではないが、こういう活動なら続けられる」と取り組みの一例を示した。

このほか、教職員の負担軽減や地域との関わり方についても意見を交わした。

大会はコロナの影響で第69回は中止、第70回は大会記録の発行のみとなり、3年ぶりの開催となった。

岩手日報 令和4年7月2日付

編集後記

第71回東北地区高等学校PTA連合会盛岡大会を、7月1日に盛岡市民文化ホールを会場に開催しました。「7月1日」に「第71回大会」開催というのは大変憶えやすい日程でしたが、大会のそのものも皆様の記憶に残るものになるようにと、大柏良会長・志田順悦実行委員長を始めとする大会関係者一同、企画・運営にあたりました。生活の全てに新型コロナウィルス感染症の影響を受けざるを得ない昨今の状況の中で、一部の行事を変更したものの、無事に大会を開催でき、多くの皆様のご参加を頂いたことは、開催県である私どもにとって大きな喜びとなりました。皆様に御礼を申し上げます。

テーマを、「『えん』～応えよう、援けよう、団まろう！子どもたちの未来のために～」とし、子どもたちの一番の応援団であり続けようというコンセプトで企画した今大会でした。テーマにちなみ、県内各校で活躍する応援団の中から、盛岡第二高校、花巻北高校、不来方高校の三校が、映像出演してくれました。凜とした女子応援団、伝統のバンカラ応援団、華やかなチアリーダーと、三校それぞれの校風を活かした個性的な応援を見ると、応援している応援団を応援したくなりました。高校生の活躍もご覧頂きました。盛岡第二高校の薙刀部の演舞は、軽快な音楽に乗せて武道の心を美しく体現し、「メン！コテ！スネ！ドウ！」の裂帛の発声が会場に響きました。盛岡第一高校の吹奏楽部は、私たち保護者に「子どもたちとの共通の話題作り」をと、息のあった演奏でたくさんのヒット曲を教えてくれました。盛岡商業高校のさんさ踊り実行委員会は、盛岡の夏の風物詩であるさんさ踊りを流麗に、力強く披露してくれました。今年は3年ぶりにお祭りも開催予定で、活躍が期待されます。

研究協議では「新しい生活様式における持続可能なPTA活動とは」として、各県の代表によるパネルディスカッションで多面的な視点からPTA活動を考えました。南部美人5代目蔵本の久慈浩介さんの「『南部美人の挑戦』～地域を照らす光になるために～」と題した記念講演では、果たすべき役割を自覚的に捉えることの大切さを改めて学びました。盛岡大会がご参加の皆様に送ったエールは届きましたでしょうか。

結びに、東北地区各県事務局はじめ、東北地区PTA会員並びに各関係機関の皆様の多大なるご支援、ご協力に感謝申し上げ、編集後記と致します。来年は福島でお会いしましょう！

盛岡大会実行委員　村上 智加子（盛岡第二高等学校PTA会長）

〈実行委員会写真〉

2021年6月16日

2022年5月20日

第71回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会盛岡大会報告書

編集　第 71 回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会
盛岡大会実行委員会事務局
岩手県高等学校ＰＴＡ連合会
〒 020-8515　盛岡市上田３丁目２- 1
岩手県立盛岡第一高等学校内
TEL ／ 019-625-6386　FAX ／ 019-613-7795
E-mail ／ iwa-koupren@aroma.ocn.ne.jp

印刷　川口印刷工業株式会社
〒 020-0841　盛岡市羽場 10 地割 1 番地 2
TEL ／ 019-632-2211　FAX ／ 019-632-2217